

# 富田林の自然

人と生きものがひびきあう  
里山をめざして



No.1  
2003年3月

富田林の自然を守る市民運動協議会

表紙の写真

---

奥の谷のレンゲ田で遊ぶ

富田林の自然を守る会は、毎年秋になると奥の谷の田圃に、みんなでレンゲの種を蒔きます。4月下旬になると一面がピンクの絨毯。会の行事の時には親子で楽しく遊びます。

---

# 目 次

創刊号の発刊によせて（富田林市長 内田次郎）	2
里山の夢は広がる ＜市民と行政の協働で、自然豊かな富田林を＞（会長 田淵武夫）	3
奥の谷に咲く花	4
里山の自然と人々の暮らし ＜里山保全活動の目的と現状及び今後の活動の展望＞（木下陸男）	6
奥の谷の自然	14
奥の谷モデル地区の将来プラン 平成14年度「自然環境保全活用調査」報告書より抜粋	17
富田林とNICE・ワークキャンプについて（初田裕美）	21
「里山管理ボランティア養成講座」受講者の感想	23
石川の河川改修と自然環境（田淵武夫）	25
協議会参加団体の活動紹介 （富田林の自然を守る会、錦織公園自然友の会、富田林勤労者山岳会「嶽の会」、 NPO法人里山倶楽部、「石川あすかプラン」を考える市民連絡会）	30
平成14年度 協議会事業報告	35

# 「富田林の自然」 創刊号の発刊によせて

富田林市長 内田 次郎

富田林市民憲章では、「わたしたちの富田林市は、美しい石川のほとりに、古い歴史と伝統を育ててきました。この伝統の上に、ひとり一人の知識と創造をつみあげ、自然にめぐまれた近代的な都市に発展するため、みんなで市民憲章を守りましょう。」「自然を守り、緑と太陽にめぐまれた住みよいまちをつくりましょう。富田林市のもつ緑と太陽に恵まれた、よき自然環境のもとで、この自然を守ることにより、公害を追放し、生活環境をととのえ、みんなが住みよいまちにしましょう。」と謳われています。

南部山地部の農村集落地は、本市の中でまとまった緑や自然環境に恵まれており、既成市街地周辺に広がる農地とともに農業生産も盛んですが、山地部において自然環境が損なわれている部分もあります。したがって、ここでは農業の振興や自然環境の保全、生活環境の整備に努めながらその特性を活かした整備が必要となっています。

これまで、石川の自然環境を守る活動として石川大清掃が行われ、また、彼方（奥の谷）での自然環境保全の活動や国際ワークキャンプの開催などが、市民のみなさんのボランティア活動として進められ、昨年3月には、富田林の自然環境の保全を市民運動として推進する団体として、「富田林の自然を守る市民運動協議会」が結成されさまざまな活動がすすめられてきました。

この一年間に、里山管理作業、生きもの水辺づくり、嶽山の草花観察会、昆虫ウォッチング、里山管理ボランティア養成講座、自然クラフト、野草を食べる会などや毎年夏の国際ワークキャンプなどが行われ、そのまとめとして、この度「富田林の自然」の創刊号の発刊が行われました。

今後も、参加団体の自主性を大切に、知恵と力を発揮していただき、市民のみなさんと共に活動を益々発展させていただきましますよう、お願いいたしまして、発刊によせての言葉とさせていただきます。

2003年3月

# 里山の夢は広がる

市民と行政の協働で、自然豊かな富田林を

富田林の自然を守る市民運動協議会

会長 田 淵 武 夫

滝谷不動尊から細い農道を南に入ると急に静かな谷あいとなります。土地の人々はこの谷を奥の谷と呼んでいます。谷の両側はコナラを中心とした雑木林で、一部にスギ・ヒノキの植林地が見られます。中央には水田があり、上部には溜池が散在しており、典型的な里山の景観が望めます。

この周辺の山と田圃の畦や溜池の土手などには、ショウジョウバカマやササユリなどの林床植物、ワレモコウやリンドウなどの草原植物、コバノミツバツツジなどの雑木林の小低木が美しい花をひっそりと咲かせます。また、溜池や水路にはメダカやヨシノボリが泳いでいます。

しかし、近年は山の手入れがなされなくなりました。また、田圃の多くが休耕田となり、用水路は三面張りとなって、これらの草花や生き物がめっきり少なくなっています。

私たちは1996年頃からこの谷で、これらの動植物を守るために里山保全の活動を始めました。現在私たちは、「雑木林の間伐、下刈り」、「スギ・ヒノキ林の間伐、枝打ち」、「休耕田や溜池の土手の草刈り」、「休耕田を利用した水の生き物の保護と育成」の4つのことを行っています。そして、「奥の谷に生息する動植物の生息状況調査」や「自然観察会」、「野草を食べる会」、「昆虫観察会」、「つる細工の会」など楽しい行事も行っています。

1999年の夏からは毎年、NICE(日本国際ワークキャンプセンター)が主催する国際ワークキャンプを受け入れ、海外の若者たちと日本の若者たちの力でスギ・ヒノキ林の間伐、美しい森が広がっています。そして、毎月の作業にも日本の若者たちは入れ替わり立ち替わり来てくれます。地元の人たちの参加も段々と増え、小さな子どもたちからお年寄りまで、わけあいあいと楽しく作業しています。

「春になると雑木林にヤマザクラやツツジなどが、林床にはシュンランやショウジョウバカマなどがあちこちに咲き、田圃の畦にはタンポポやキンポウゲ、スミレなどが咲き乱れる。水の生き物池にはメダカやヤゴなどがいっぱい。夏には、子どもたちがカブトやクワガタ捕りに興じる。秋には……。冬には……。」と奥の谷の夢は広がるばかりです。

「富田林の自然を守る市民運動協議会」の活動が始まって、行政が身近に感じられるようになってきました。そして、自然を守る運動がさらに大きく広がりはじめています。市民と行政との協働で、そして地権者の協力を得て、奥の谷を多様な田園生態系と美しい景観をもつ里山として保全していきたいと思います。そして、このような取り組みが奥の谷だけでなく、富田林のまちづくりに生かされ、大阪のオアシスとして、自然豊かな、生きものと共生するまちをみんなで作っていききたいものです。

春

# 奥の谷に咲く花



ササユリ



シュンラン



ショウジョウバカマ



フキ



ウマノアシガタ



ツクシ

秋



ツルリンドウ



ヤマジノホトトギス



リンドウ



ツリガネニンジン



ヨメナ



ワレモコウ

# 「里山の自然と人々の暮らし」

## < 里山保全活動の目的と現状及び今後の活動の展望など >

(社)大阪自然環境保全協会 木下陸男

### 1. はじめに

私たちの身近な自然である里山は、単に“みどり”としての景観機能だけでなく、災害から人々を守り、豊かな水を提供してくれます。また、植物を育てる土をつくり、四季折々の美しい花を咲かせます。そして、シカ、キツネ、タヌキ、リスなどの動物たちやオオムラサキ、カブトムシ、ホタルなど様々な生き物の生息場所ともなっています。

私たちは、祖先が大切に守り育ててきた薪炭林や、農用林などの里山を市民の手でリフレッシュし、各地の風土や伝統的技術を活かした美しい「里山・田園環境の保全」に取り組んでいます。

我が国の自然の多くは、過去の人間活動とのかかわりの中で、その地方の気候風土や農業的土地利用に適応し、複雑で多様な生物を育んできました。近年、これらの二次的自然に生息・生育する多くの動植物が、人間社会の急激な変化によって絶滅の危機に瀕しています。私たちはこのような状況をふまえ、1983年身近な生物・生態系の保全を前提とした「里山の保全と新しい活用」を提唱し、その普及と啓発にとりくんできました。この提案は自然保護運動における新しい展開として、都市近郊の“みどり”の保全だけでなく、各地の「まちづくり」「村おこし」などとしても大きな広がりを見せています。現在、北海道から鹿児島までの全ての都道府県に活動組織が作られ、行政主導型の組織も含めて約3000グループが活動しており、この中の1040程度が恒常的な組織を持っているそうです(日本自然保護協会・調査)。このような運動の広がりによって、国や地方自治体でも市民参加による環境保全活動として、重点施策の一つに位置づけるまでになっています。

### 2. 里山へのアプローチ(里山保全活動への3つの要因)

#### \* 自然保護運動の流れとしての里山保全(告発型・事後処理型から提案型・参加型へ)

我が国の環境保護運動は明治40年、田中正造による足尾銅山鉱毒事件が有名ですが自然保護の主流は三好学等の学者によって提唱された史跡名勝天然記念物保存法(1919)や国立公園法(1931)に象徴される稀少動植物や観光資源の保存活用でした。本格的な自然保護運動はヨーロッパ諸国より約半世紀遅く、昭和24年(1949)から取り組まれた尾瀬沼の保護運動です。

1960年代、戦後の高度経済成長政策の結果、新潟、四日市、川崎、水俣など各地で大規模な公害が発生、河川・海を始めとして人の命まで奪われるほどになりました。公害反対運動は全国に広がり大国民運動となりましたが、この時期、運動の形態は告発型・事後処理型の市民運動でした。1974年私たちは全国自然保護大会を開催し、それまでの運動のまとめとして次のように宣言しまし

た。「自然の保護は私たち自身の生活環境を守る最前線であり・・・公害反対や自然保護も広く“環境を守る”という立場で捉え、子孫も含めて人間に害が及ぶ前に運動を展開する必要がある」と。告発型・事後処理型の運動から提案型・参加型の運動への転換を呼びかけるこの宣言は、その後の環境保全活動や自然保護運動の質的転換を示唆するものとなりました。私たちの暮らしに直接する身近な自然である「里山」の保全活動は、まさにこの流れの中で生まれたテーマなのです。

#### \* 多様な生き物との共生空間としての里山保全(多様な環境保全=生物多様性の保全)

大阪を始め日本の自然の多くは、過去の人間との関わりの中で日本的な気候風土や農業的土地利用に適応した複雑な生物層を育んできました。それは近年まで都市周辺の近郊農村地域に最も豊に、しかも緊張した相互依存の形で残されて来ました。

日本の農業は「米」を中心とした自立自給型の

基礎構造の上にそれぞれの地域や気候風土にあった地場産業や特産品を生産し、ある意味で都市と対等かつ柔軟な経済構造を備えていました。「山を一つ越えれば国が違う」といわれるほど微細で多様な気候風土と、その柔軟な農村の生産形態が各地の特色ある美しい農村風景を創り出し、そこに様々な生き物を育む環境を維持してきたといえます。

日本の野生動物の多くは比較的人里近くに生息しており、シカをはじめイノシシ、キツネ、タヌキ、テン、イタチ、リス、ノウサギなど、おとぎ話や物語にしばしば登場し、人間と騙したり騙されたりしながらしたたかに暮らしている、いわゆる里山動物なのです。

生き物にとってはその生息場所、生息環境が安定して確保されていることが最も重要な条件です。したがって、身近なこれらの里山の生物を守るには、彼らの数千年にわたる暮らしの場であった、我が国の伝統的な農村環境(里山・田園環境)を保全することが最も重要なのです。

オオムラサキやカブトムシ、ホタルなどの昆虫類やメダカなどの小さな生き物たちも、人と自然の長いかわりの歴史の産物であり、しかるべくしてそこに生息しているのです。

日本の生き物は水田や溜池、河川、水路、そして集落近くの雑木林(里山)に多くが生息しているのが特徴であり、したがって、これらの農村的な環境(稲作生態系)をセットとして保全することが多様な生物保全にとって大変重要なのです。

#### \* 豊かな暮らしの指標としての里山の保全と活用(豊かさを実感する“まちづくり”)

一般的に自然保護運動の理念とか思想を語るとき、その多くは地球環境の危機や自然界における動植物の絶滅について、あるいは地球資源の浪費や環境汚染について語られることから始まります。私たちはこの自然保護という堅苦しい課題を、日常の暮らしの視点から見直すことで、豊かな暮らしの指標としての里山の保全と活用を提案しています。

私は豊かな暮らしの条件として次の様なことを挙げます。人は何よりも健康であることが第一です。公害や交通事故で人の命が奪われたり、ガンや病気で長期入院ともなれば家族や周りの人々まで不幸にします。また、家族の最小単位である夫婦、親子、兄弟がさしたるトラブルもなく円

満であることは幸せの証拠ですし、地域社会が安定していて多くの友人や隣人とも交流があり、犯罪や災害などの心配がないことも大切です。高度経済成長政策の中で徹底的に無視されてきたのが、この家族や地域社会の崩壊でした。

現在、我が国の経済不況は深刻です。企業倒産やリストラで失業率は5%を越え就職活動は大変ですが、中でも自分の専門知識や経験を活かしたり、やりたい仕事ができる人は極めて希です。自分の能力を活かし、楽しく働けること。余暇を活かして社会活動(ボランティア活動)に参加するなど、社会の中で役立つ場があること。豊かな教養や趣味を持ち日々の生活を楽しむことができ、老後や病気になっても不安がない程度の社会的保証があることなどが大切な要素です。そして、これらの社会基盤の上に近くに公園や緑が豊かで野鳥やリス、ノウサギなどとも出会える自然があること、そしてなによりも暮らしを楽しむゆったりとした時間と心のゆとりがもてるのが大切だと思います。

私たち市民が求める豊かさは、高層ビルや高速道路に取り囲まれた巨大都市で、贅沢三昧する暮らしではありません。このようなものはたった30秒で跡形もなく崩壊する砂上の楼閣に過ぎないことは、先の阪神淡路大震災で証明済みです。私たちは豊かな暮らしの基盤になるものとして、人々の暮らしとつながる豊かな自然があることが大切だと考えています。大阪など都市を取り巻く里山の自然は、まさに人々の暮らしと深くかわりつつ変遷してきた心の故郷でもあるのです。

### 3. 里山とは

#### \* 里山の成立と人々の暮らし<里山はいつ、どのようにして出来たか>

里山の成立は、その前提としての里(一定規模の秩序を持った集落)が何時どのようにして出来たか?という問題があります。「里」という字は「田」と「土」から構成されています。「田」は一定の土地を囲い込む状況を示しており、「土」は大地から草木が芽生える様を表現したものと説があります。私は整然と区画された大地から早苗が芽生える「水田稲作」の風景を表したものだと思います。

資料No.1は元国立民族博物館長の佐々木高明さんが研究された「稲作の起源地と伝播路」に示されたものです。世界各地の稲作は、インド北部

のアッサム地方や中国の雲南、メコン川やサルウィン川の上流域の東南アジアの北部地域などの起源地(いわゆるライスセンター)から各地に伝播したとされ、我が国の稲作は今から2300~2400年前にこれらの起源地から長江流域を東に伝わり、朝鮮半島南部地域を經由して北九州に伝来したとされます。次の資料No.2は随分古い資料ですが大阪市立大学(当時)の梶山彦太郎さんと市原実さんの研究による大阪平野の変遷を示す4枚の図です。ここでは縄文前期(7000年前)から、稲作が伝わり日本各地に強力な豪族国家が生まれる古墳時代前期(1600年前)までが古地理図によって示されています。この2つの資料は、我が国に大陸から稲作文化が伝えられ、やがて瀬戸内を經由して大阪平野や大和盆地に広がり、初期稲作技術を脱却して、大規模な灌漑技術の導入による大きな集落(里)が生まれ、やがて強大な大和政権が誕生するダイナミズムを彷彿とさせるものです。

「里」の定義は646年に出された大化の改新の詔勅、大綱に示された均田制、租庸調制の4ヶ条に規定されており、その中に「班田収授の法を造り、凡て50戸を里とする」とあります。ちなみに、この規定では一里=50郷戸=1250人、郷戸=25人(3~4家族)、房戸=7~9人(1家族)とあり、里の上は郡(こうり)が使われ、それぞれ小郡(3里以下)中郡(4里~30里)大郡(40里)と呼ばれて、これらは現在も「郡」として生きています。すなわち、この頃になると我が国の水田稲作は、国家の基幹産業となり、法を制定してコントロールするほどに発展しているわけです。このようにして大きな古代都市や農村集落が発達し、多くの里人が暮らしを営む地域では、この暮らしを維持する燃料や用材など様々な需要がおこり、有機肥料などの採取以外にも周辺の野山を利用することになります。その結果周辺の自然は本来の姿を変え、それぞれの地域の利用形態に即した独特の景観を作り上げたのです。このようにして成立した野山のことを私たちは里山と呼んでいます。

大阪周辺の林野はかつて、そのほとんどがアカマツ林であったと言われていたのですが、その原因は農用林として下草や柴、落ち葉などが水田への「刈り敷き」として使われる以外にも、須恵器などの土器や瓦、タコツボの焼成のために燃材として利用されてきたことが挙げられます。また、赤

穂などでは塩の生産のために過剰利用となり、周辺の野山はハゲ山となってしまいました。一方、生駒山系や北摂山系の山麓には美しいクヌギ・コナラなどの雑木林が広く分布します。これは6世紀、聖徳太子が国を治めるのに仏教思想をその柱としたことで、大陸から仏教と共に立派な寺院や仏閣の建築技術、仏像の鑄造技術が伝えられ、仏像造りが盛んに行われるようになりました。さらに大陸からの新しい文化の流入と貴族社会の成立などで、広大な寝殿造りが次々と建築され、炭櫃(すみびつ)、火桶が必需品となるなど炭の需要が急速に拡大しました。その結果、都の周辺に大規模な薪炭専用林が造られるようになったのです。このように、私たちが今観ることが出来る景観の多くは、かつての祖先の営んできた生業と深くかかわって成立したものであり、人間と自然が織りなす独特の風土景観を創り上げています。このような2次的に成立した自然景観を里山と呼んでいます。

資料No.3日本の農村を構成する要素(農の風景)は日本のどの地域でも観ることが出来る景観です。農家を中心として水田や水路、溜め池などの水系、裏山にはタケ林や薪炭林としてのクヌギ林、尾根筋にアカマツの林、さらに鳥居をくぐると鬱蒼とした照葉の森が奥山に繋がっています。村の入り口には六地藏が祭られ、結界を示しています。それぞれの村落ごとに共同体としての掟をもち、個々の農家は生産から消費に至る循環型の完結した暮らしを営んでいました。これは今、世界のエコロジストが最も注目するシステムであると言われていています。私たちは、出来ればこのようなすぐれた里山・田園景観をシステムごと残し、自然環境の保全や生物生態系の保全にとどまらず、自然との共生を目指す21世紀への教科書としたいと考えています。

#### 4. 日本の原風景と稲作生態系 < 資料No.4 >

\* 日本の自然・故郷の原風景 = “ なつかしさ ” の生態学

\* 市民のボランティアで「里山」づくり(人材を育てる)

#### 5. 21世紀を豊かに生きるための5つのキーワード

里山は今日、防災・水源・景観・保健・レクリエーション・教育などの都市機能としての役割

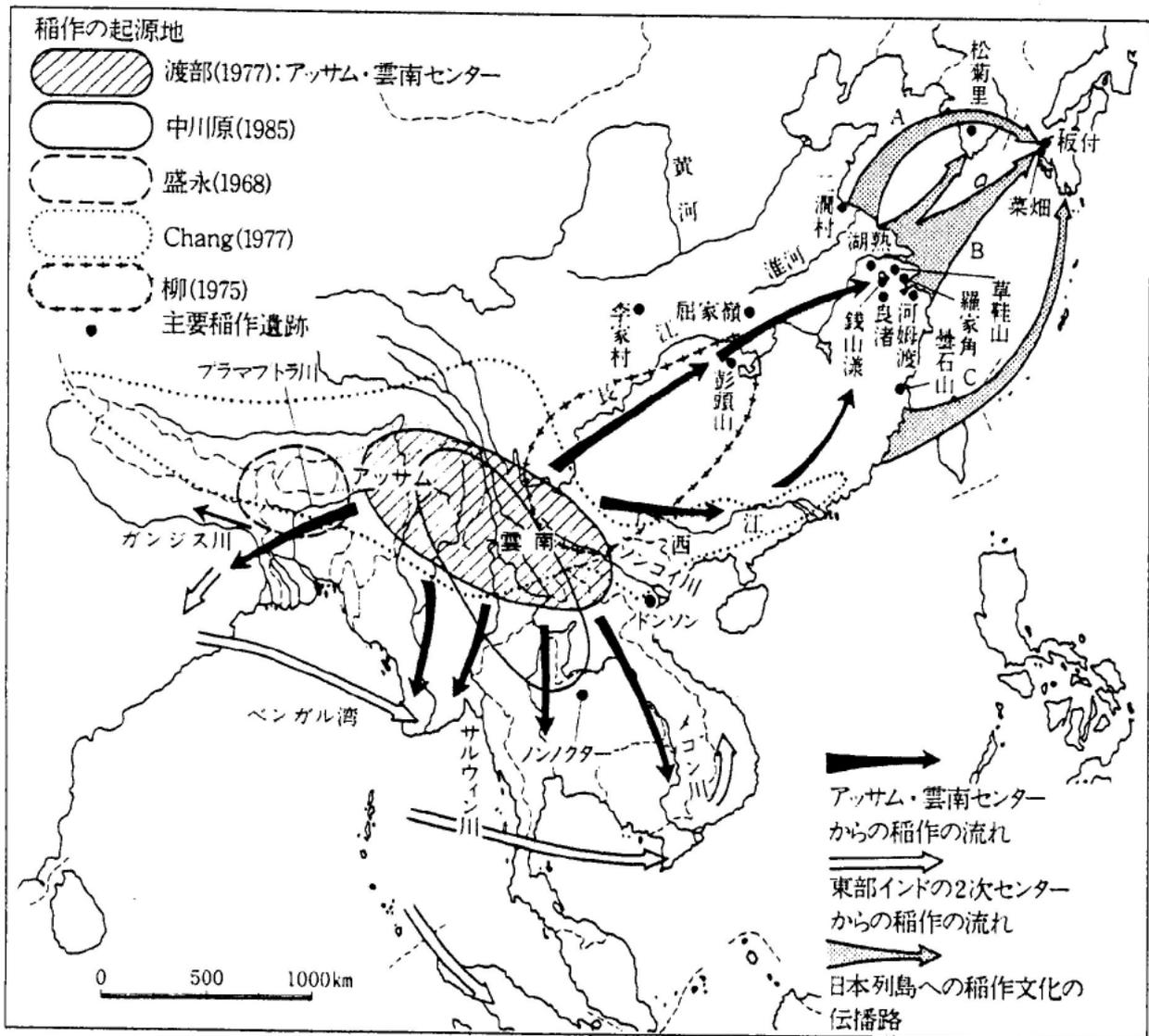
や、多様な生物の生息場所としても重要であることが広く市民に認識されてきました。すなわち、身近な自然である「里山・田園環境の保全」とその活用は、市民ボランティアの新しい活動分野として、都市環境の改善や身近な生物生態系の保全、人と自然のふれ合いの場や子供たちの自然体験、自然学習の場として、また、地域の伝統文化や伝統技術の継承、安全で安定した食料生産のための農地保全など様々な活動が展開されようとしています。これらの諸活動を整理し、21世紀における環境保全政策の柱として取り組むには、次の5つの視点からのアプローチが必要であると考えています。

(里山・田園環境保全政策の推進及び法制化にあたって検討すべき項目)

- \* 都市の“みどり”としての里山  
都市機能(水源・防災・アメニティー・景観など)及び都市基盤となる“みどり”として里山・田園景観を位置づけ、市民参画による保全計画を作成する。
  - \* 多様な生き物の棲息場所としての里山  
雑木林・水田・溜め池など、身近で多様な生き物の生息場所として、生物多様性保全のモデルとして里山・田園環境を積極的に位置づけて活用する(国際的アピールも行う)。
  - \* 安全で安定した食料の生産の場としての里山  
21世紀に必ずやってくるという食料危機はもちろんのこと、安全で安定した食料生産を目的とした新しい都市農業(大規模市民農園や学習農園・環境保全・景観保全のための農園など)制度の創設と農地・土壌保全及び交流拠点としての里山・田園環境の整備。
  - \* レクリエーションなど人と自然のかかわりの場としての里山  
レクリエーション、環境学習、いきがい活動、市民の森づくりなど人と自然のふれ合いの場や健康づくりのための里山の保全と活用。
  - \* 伝統文化や技術の伝承, 心の故郷としての里山  
伝統文化・伝統技術・伝統産業(特産物)など人々の心と繋がる里山文化の保全と継承。
6. 21世紀への提言
- \* 「里山・田園環境保全法」の制定  
現在「里山の保全」活動は全国に広がっています。しかし、それぞれの活動場所や活動内容は法制度(条例等を含め)によって保証されたものではありません。多くの場合、土地所有形態(私有地)や相続税及び農地・水利等に関する慣習などの障害によって様々な困難が生じています。私たちは21世紀における「豊かな暮らし」の基盤造りを進めるには、多くの市民の参加や参画なしには不可能であると考えており、これらの諸活動を支える法令(たとえば里山・田園環境保全法(条例)など)の整備や体制(システム)づくりを早急に整えなければならないと考えています。
  - \* 国際環境保全ボランティアネット  
私たちが取り組んでいる市民参加による「里山・田園環境」の保全活動は、国民的ボランティアによる様々な活動を展開しているイギリスを始め、欧米諸国でも注目しています。中でも我が国の伝統的な農業的手法による環境保全活動は「生物多様性保全」や「持続する社会」システムのモデルとして国際的にもその成果が期待されています。  
このような環境保全活動や環境ボランティアの先進国だけでなく、里山・田園環境保全活動は、我が国と同様に稲作農業を行う東南アジアや東アジアをはじめ、インドやスリランカなどといった国々とも共通する課題としてネットワークを構成することが可能です。ナイスな世界の青年・学生たちを先導役としてオジさんオバさんたちも羽ばたいてみてはいかがでしょうか。

稲作の起源地と伝播路 < 里山の成立 - 稲作文化の伝来 - >

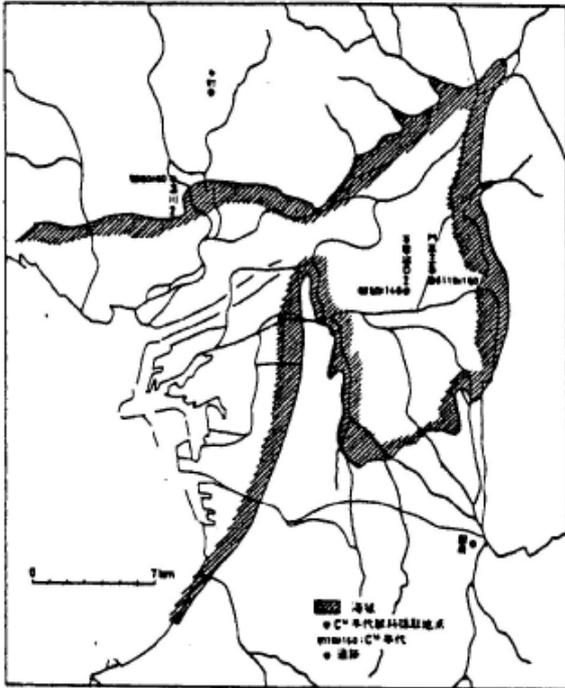
稲作はアッサム・雲南・東南アジア北部を中心とする起源地(ライスセンター)から東・西・南方に伝播した。  
 長江(揚子江)流域には古い稲作遺跡が集中し、そこから朝鮮半島南部や日本の北九州に伝来したと考えられる。



< 佐々木高明：弥生文化 - 日本の源流をさぐる - (大阪府立弥生文化博物館発行) 1991 > より

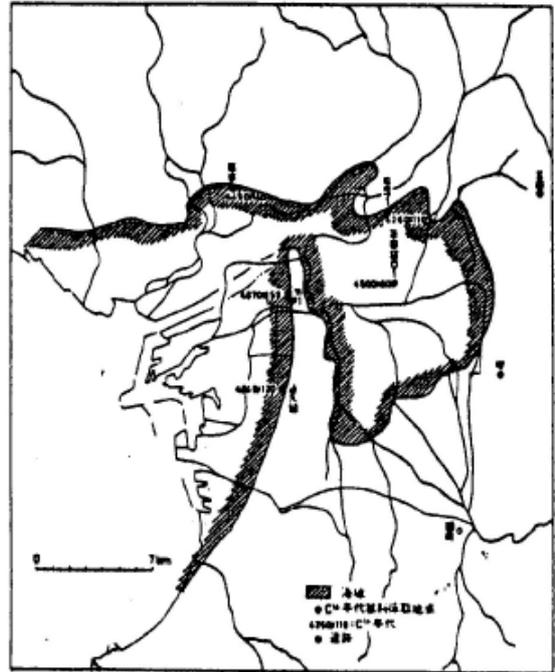
大阪平野発達史<縄文前期(7000年前)～古墳時代前期(1600年前)の大阪平野の変遷>

大阪平野発達史(梶山, 市原1972)の図



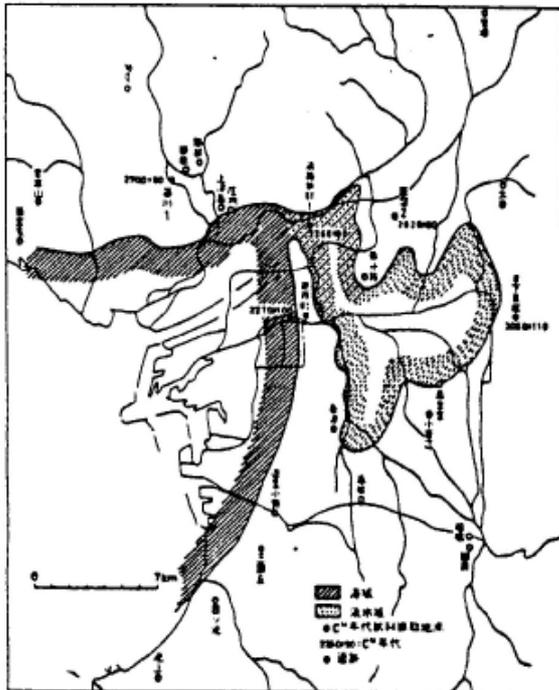
河内湾Ⅰの時代(約7000～6000年前, 縄文時代前期前半)の古地理図

大阪平野発達史(梶山, 市原1972)の図



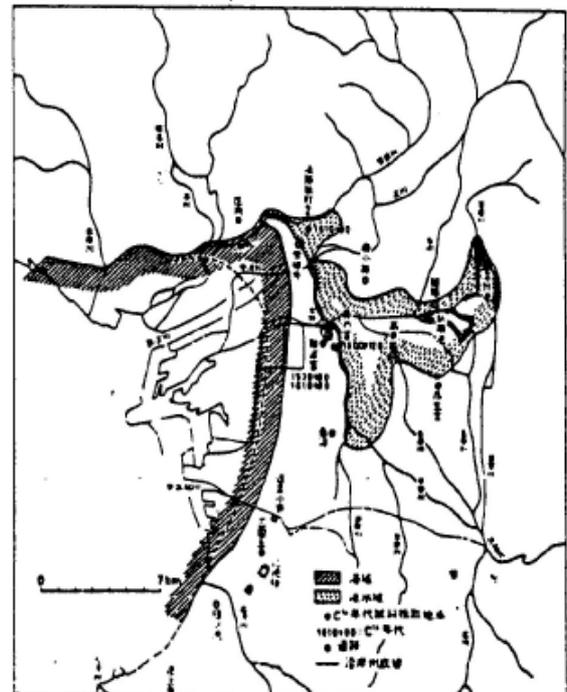
河内湾Ⅱの時代(約5000～4000年前, 縄文時代前期末～縄文時代中期)の古地理図

大阪平野発達史(梶山, 市原1972)の図



河内湖の時代(約3000～2000年前, 縄文時代晩期～弥生時代前半)の古地理図

大阪平野発達史(梶山, 市原1972)の図

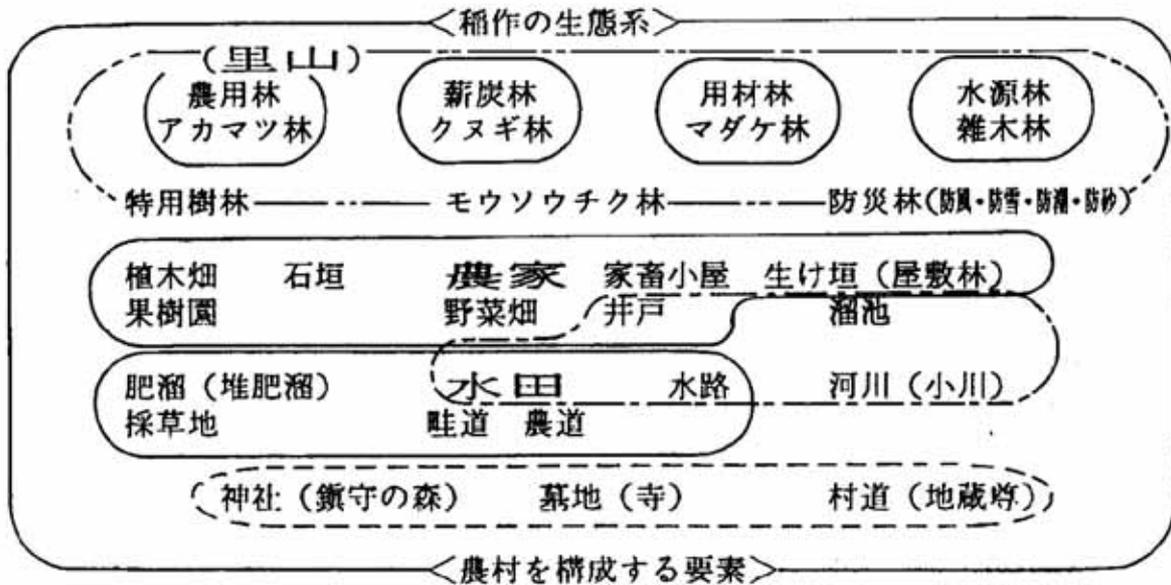


河内湖Ⅰの時代(約1800～1600年前, 弥生時代後期～古墳時代前期)の古地理図

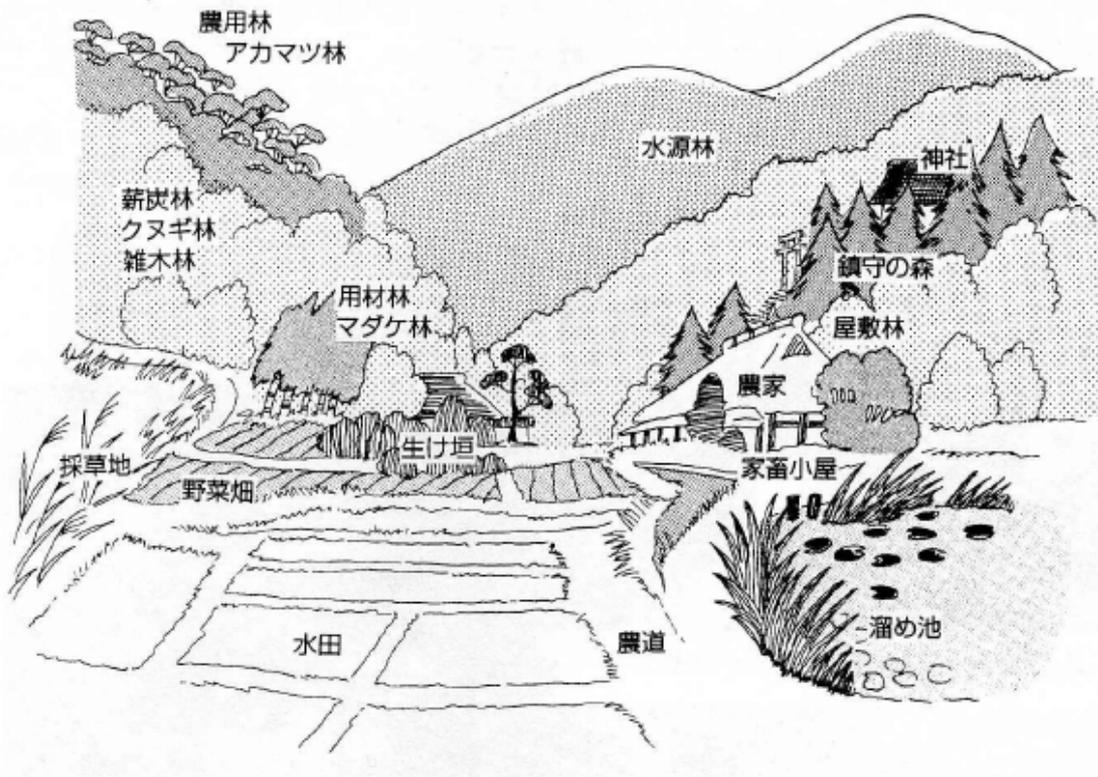
< 梶山彦太郎, 市原 実:大阪平野の発達史(大阪市大地質学論集)1972 > より

日本の農村を構成する要素 < 里山の成立 - 稲作生態系 - >

都市（集落）の周辺に広がる里山は、私たちの祖先が弥生時代から今日まで、およそ2000年にわたって営んできた水田稲作農耕と深く関わって成立したものと考えられる。



< 木下陸男：里山管理マニュアル，(社)大阪自然環境保全協会発行，1994 > より



< 里山管理ハンドブック，(社)大阪自然環境保全協会発行，1996 > より

## 日本の原風景と稲作生態系



日本人の心の原風景  
農家を中心に水田や水路があり、裏山にはクヌギ林等の里山が広がる。



里山管理の7つ道具  
市民の手で里山をリフレッシュする。  
ノコ、カマ、ナタは作業道具の基本です。



棚田は景観として美しいだけでなく、豊かな水環境や生物の生息環境を保全する。



観察路づくり  
里山作業で大量に出る間伐剤を使って、自然観察路も自分達で。



里山の恵み  
里山は自然体験や自然観察の最良のフィールドです。



簡易炭焼釜  
ドラム缶を使った簡易釜。竹炭づくりは全国的ブームです。

# 奥の谷の自然

滝谷不動尊から細い農道を南へ入ると、のどかな田園風景が現れます。幅約 50m、奥行き約 1Km の小さな谷の上部には数個の溜池が散在し、中央部に水田が連なります。谷の両側はコナラを中心とした雑木林で、一部はスギ・ヒノキの植林地となっています。20 数年前まではアカマツ林が多かったそうですが、松枯れによって最近ではほとんどアカマツは見られません。また、かつてはミカン園だった山の多くが現在はスギ・ヒノキ林となっています。水田は一部で耕作されていますが、休耕田が多く、放置された休耕田は、たいていネザサで覆われ、貧弱な植生となっています。



早春の奥の谷

奥の谷の植物 (p.4-5 の写真参照)

奥の谷の農道を歩きながら左右にみられる植物 (花をつけていた植物) は、1997 に富田林の自然を守る会が調査したところによると 121 種類が記録されています。その内帰化植物が 27 種類 (22.3%) ありました。これらの植物のうち花のきれいなものを 30 種選んで表 1 に示しておきます。

奥の谷の林床にはこのほか、ショウジョウバカマ (3-4月)、シュンラン (4月)、ササユリ (6月)、コクラン (6-7月)、ヤブミョウガ (8-9月)、ヤブラン (8-9月)、ヤマジノホトトギス (9月)、ツルリンドウ (9-10月) などがあります。

また、雑木林にはコナラに混じって、ヤマザクラ (4月)、ウワミズザクラ (4月)、ザイフリボク (4月)、などが咲き、林縁や林内にはコバノミツバツツジ (4月)、コバノガマズミ (4月)、ウツギ (5月)、マルバウツギ (5月)、モチツツジ (5月)、ネジキ (5月) などの小低木が花を咲かせます。

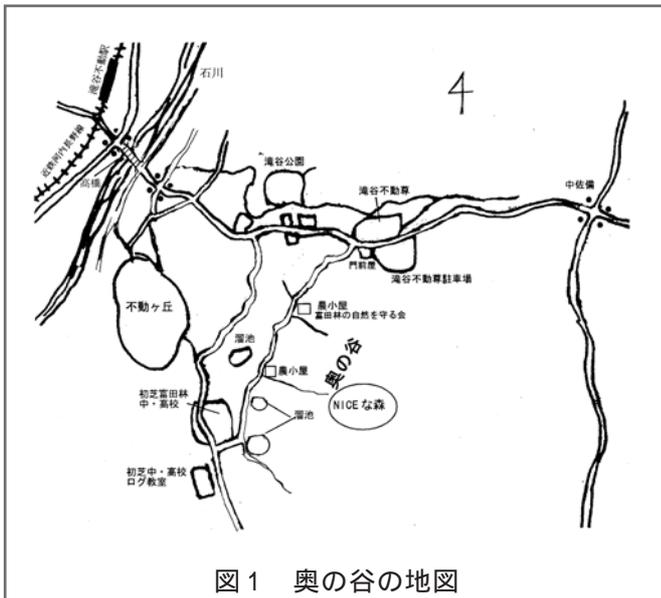


図 1 奥の谷の地図

## 奥の谷の動物

奥の谷に棲む動物は、昆虫以外は特に調べていませんが、自然観察会や里山管理作業などのとき、目にしたものを以下に記しておきます。

ウサギ sp (糞)、モグラ sp (穴)、ネズミ sp (巣)、アオダイショウ、マムシ、シマヘビ、カナヘビ、トカゲ、トノサマガエル、ニホンアカガエル、ツチガエル、ウシガエル (声)、フトミミズ sp、メダカ、ヨシノボリ、エビ sp、アメリカザリ

ガニ、カワニナ、モノアラガイ。

野鳥については私達は調べていませんが、1985年に滝谷地区で67種類が津田貴司さんにより記録されています（「都市と自然」No.113,1985）。

奥の谷にはたくさんの昆虫がいます。春先にはツマキチョウがひらひらとあぜ道に舞い、少し遅れて、モンシロチョウ、アゲハチョウ、アカタテハ、ツマグロヒョウモン



アサギマダラ

などが畑の花をおとづれます。2001年に調査した昆虫を、それ以前や以後に採集したものも含めて、同定できたものを、表2に示します。チョウだけで38種類が採集できました。

表1 奥の谷の道端の主な植物

No.	種名	科名	原産	開花月
1	カンサイタンポポ	キク科	在来種	1-5
2	ヒメオドリコソウ	シソ科	ヨーロッパ	2-4
3	タチツボスミレ	スミレ科	在来種	3-4
4	シャガ	アヤメ科	在来種	4
5	ムラサキサギゴケ	ゴマノハグサ科	在来種	4-5
6	ウマノアシガタ	キンボウゲ科	在来種	4-6
7	ニガナ	キク科	在来種	4-6
8	アメリカフウロ	フウロソウ科	北アメリカ	4-6
9	ハルジオン	キク科	北アメリカ	5
10	ニワゼキショウ	アヤメ科	北アメリカ	5-6
11	ブタナ	キク科	ヨーロッパ	5-9
12	オカトラノオ	サクラソウ科	在来種	6
13	ネジバナ	ラン科	在来種	6
14	ガマ	ガマ科	在来種	6-9
15	ノアザミ	キク科	在来種	6-11
16	センニンソウ	キンボウゲ科	在来種	7-8
17	カラスウリ	ウリ科	在来種	8
18	キンミズヒキ	バラ科	在来種	8-9
19	アキノノゲシ	キク科	在来種	8-11
20	ヒヨドリバナ	キク科	在来種	8-11
21	ワレモコウ	バラ科	在来種	8-11
22	アキノタムラソウ	シソ科	在来種	8-11
23	ヨメナ	キク科	在来種	8-12
24	ゲンノショウコ	フウロソウ科	在来種	9
25	ヒガンバナ	ヒガンバナ科	在来種	9
26	ススキ	イネ科	在来種	9-10
27	ツリガネニンジン	キキョウ科	在来種	9-11
28	イナカギク	キク科	在来種	10
29	リンドウ	リンドウ科	在来種	10
30	ヤクシソウ	キク科	在来種	10-11

### 里山管理で多様な生態系を

奥の谷には上記のような動物や植物が生息していますが、雑木林やスギ・ヒノキ林、田圃の畦や溜池の土手などが放置されたり、用水路が3面張りになるなどで、これらの生き物が段々少なくなってきました。



水の生き物捕り



草刈りした草の堆肥に発生したカブトムシの幼虫

富田林の自然を守る会では、雑木林やスギ・ヒノキ林の下刈り・間伐・枝打ち、田の畦などの草刈り、休耕田を利用した水の生き物池づくりなどを行い、豊かな里山の生態系を取り戻す活動を行っています。また、クラフト作りや昆虫観察会など、自然に親しむ楽しい行事を行っています。

表2 嶽山の昆虫リスト

科名		種名	採集年月日	科名		種名	採集年月日		
チョウ類 (鱗翅目)	アゲハチョウ科	1 クロアゲハ	2001.7.14.	甲虫目	56 オサムシ科	アキタクロナガオサムシ	2002.4.7.		
		2 アゲハ	2001.6.16.		57 カミキリムシ科	ニセノコギリカミキリ	2000.7.29		
		3 アオスジアゲハ	2001.7.15.		58	チャゴマフカミキリ	1999.8.14.		
	ウラギンシジミ科	4 ウラギンシジミ	2001.10.8.		59 カミキリモドキ科	アオカミキリモドキ	1999.5.22.		
	シジミチョウ科	5 アカシジミ	2001.6.16		60 ガムシ科	ヒメガムシ	2000.7.29.		
		6 ミズイロオナガシジミ	2001.6.10		61 クワガタムシ科	61 ミヤマクワガタ	2001.7.14.		
		7 ツバメシジミ	1997.4.13			62	クワガタ	2001.7.14.	
		8 ルリシジミ	2001.6.16		63	シロテンハナムグリ	2001.6.16.		
		9 ヤマトシジミ	2002.3.30.			64	マメコガネ	2001.6.10.	
		10 コツバメ	2001.4.14.			65	クロハナムグリ	2001.9.9.	
	11 ベニシジミ	2001.4.30	66			カブトムシ	2000.7.29.		
	ジャノメチョウ科	12 サトキマダラヒカゲ	1997.6.1.			67	オオコフコガネ	2000.7.29.	
		13 ヒカゲチョウ	2001.6.16.			68	ムラサキツバハナムグリ	2001.6.16.	
		14 クロヒカゲ	2001.9.24.			69	カナブン	2001.7.1.	
		15 コジャノメ	2001.6.16.			70	アオドウガネ	2000.7.29.	
		16 ヒメウラナミジャノメ	2001.4.30.				71	ドウガネブイブイ	2000.6.3.
		17 ヒメウラナミジャノメ	2001.4.22.			72	コガネムシ	2000.6.3.	
	シロチョウ科	18 モンキチョウ	1999.8.28.		73		ヒメコガネ	2000.7.29.	
		19 モンシロチョウ	2001.6.16.		74		コアオハナムグリ	2001.6.10.	
		20 スジグロシロチョウ	2001.4.14.		75		クロコガネ	2000.6.3.	
		21 キチョウ	2001.4.8.		76		セマダラコガネ	2000.7.29.	
		22 ツマキチョウ	2001.4.14.		77		アカピロウドコガネ	1999.6.20.	
	セセリチョウ科	23 ダイミョウセセリ	2001.5.13.		78		オオピロウドコガネ	1999.9.11.	
		24 イチモンジセセリ	2001.5.13.		79		スジアオゴミムシ	1998.8.22.	
		25 キマダラセセリ	2001.6.24.				80	アトワアオゴミムシ	1999.9.11.
		タテハチョウ科	26 ゴマダラチョウ				2001.9.9.	81	オオヒラタゴミムシ
	27 ルリタテハ		2001.8.17.			82	オオズケゴモクムシ		1999.10.2.
	28 ツマグロヒョウモン		2001.9.24.		83	キクヒアオアトキゴミムシ	2001.4.8.		
	29 アカタテハ		2001.6.16.		84	ゴミムシダマシ科	キマワリ	2001.7.14.	
	30 ヒメアカタテハ		2001.9.24.			85	ホソヒゲナガキマワリ	2002.3.30.	
	31 イチモンジチョウ		1997.5.10.		86	コムツキムシ科	オオナガコメツキ	1999.7.10.	
	32 アサマイチモンジ		2001.9.24.			87	アカアシオオクシコメツキ	2001.4.30.	
	33 キタテハ		1997.6.8.		88 シデムシ科	オオモモフトシデムシ	2000.6.3		
	34 コミスジ		2001.5.13.		89 ゾウムシ科	シロコブゾウムシ	1997.5.10.		
	35 ミドリヒョウモン		2001.9.24.		90 タマムシ科	タマムシ	2000.8.17.		
	36 イシガキチョウ	2002.6.1.	91		テントウムシ科	ナナホシテントウ	2001.4.22.		
テングチョウ科	37 テングチョウ	2001.4.14.		92	テントウムシ	2001.6.16.			
マダラチョウ科	38 アサギマダラ	2001.10.14.	93	ハムシ科	クロウリハムシ	2001.10.8.			
アオイトトンボ科	39 アオイトトンボ	1999.10.3.		94	コガタリハムシ	2002.3.30.			
イトトンボ科	40 キイトンボ	2001.7.14.	95	ハンミョウ科	ハンミョウ	2001.4.8.			
オニヤンマ科	41 オニヤンマ	1999.8.29.	96	ヒョウタンゴミムシ科	ナガヒョウタンゴミムシ	2001.7.14.			
サナエトンボ科	42 ヤマサナエ	2001.7.1.	97	ベニボタル科	カクムネベニボタル	2001.4.30.			
	43 フタスジサナエ	1997.6.8.	98	ホソクビゴミムシ科	ミイデラゴミムシ	2001.7.14.			
	44 オグマサナエ	2001.4.14.		99	ボタル科	ゲンジボタル	2001.6.25.		
トンボ目	トンボ科	45 コシアキトンボ	2001.6.16	100		ヘイケボタル	2001.6.25.		
		46 シオカラトンボ	2001.7.1.						
		47 シオヤトンボ	1997.4.27.						
		48 オオシオカラトンボ	2001.6.9.						
		49 ショウジョウトンボ	2002.5.12.						
		50 ウスバキトンボ	2001.7.29.						
		51 マユタテアカネ	1999.10.3.						
		52 チョウトンボ	2001.7.1.						
		53 アキアカネ	2001.9.24.						
		54 ノシメトンボ	2001.9.24.						
		55 ハラピロトンボ	2002.5.12.						

## 奥の谷モデル地区の将来プラン

～ H14 年度「自然環境保全活用調査」報告書より抜粋～

本調査では、典型的な里山風景が残る「奥の谷」周辺を嶽山における里山保全活用のモデル地区と位置づけ、「奥の谷」の現況と今後の管理方針についてまとめた。

(「里山管理方針図」参照)

### 里山管理地

#### 現況

奥の谷の入口部の雑木林で、一部のモウソウチク林が拡大しつつあり、隣接するスギ・ヒノキ林にも侵入している。

#### 管理方針

所有者と相談の上、竹林の伐採を行なう。一部分に竹やぶを残し、タケノコ取り等で他に拡大しないよう管理することを検討中。



拡大しつつある竹林

### 里山管理地

#### 現況

作業小屋の道をはさんで反対側斜面のスギ・ヒノキ林で、比較的手入れされて明るい林床の部分もあるが、全体的に間伐を行なう必要がある。

隣接する雑木林は活動当初(1996～1997年頃)に草刈りを行った。昨年にはコナラを間伐して椎茸のほだ木を採取しており、切り株からの萌芽更新が見られる。

#### 管理方針

スギ・ヒノキ林の間伐を行い、より明るい環境をもった人工林とする。一部は「NICEな森2002」として間伐および入口部の階段整備などを行なった。



今年度到手入れした「NICEな森2002」

### 里山管理地

#### 現況

すでに「NICEな森」として1999年～2001年に間伐や枝打ち、道の整備を行なったスギ・ヒノキ林で、手入れ前よりはかなり明るい林となっている。

#### 管理方針

引き続き、間伐・枝打ちを行なって人工林を育成する。そのうち、「NICEな森2000」については、林のギャップができてい箇所にはコナラ等の広葉樹を植栽し、草刈り等の管理を行なって針広混交林化を目指す。



「NICEな森2000」の入口

## 里山管理地

### 現況

コナラ、ヤマモモ、ヤマザクラ等を主体とする雑木林で、下層にはヒサカキなどの常緑小径木が多いが、尾根上の明るい場所にはモチツツジが多く見られる。

### 管理方針

下層の常緑樹を伐採して明るい林床とし、その後は春以降の植物の生育状況を見ながら、間伐等を検討していく。今年度の講座で一部のヒサカキを刈り取った。



ヒサカキを刈って明るくなった林床

## 果樹の丘

### 現況

もとはササ原だった丘で、果樹を植える目的で数年前よりササ刈りを行なった。

### 管理方針

果樹園として草刈り等を行なうが、農薬等を使用しない粗放的な管理とする。

植栽果樹：ビワ、イチジク、カリ、ヒメリンゴ、アズキ、プラム、クリ、柿、ユズラメ、レモン、キンナ



## 草地管理地

### 現況

いずれも休耕田で、それぞれ異なる草地管理を行なっている。畦の斜面には、リンドウ、ワレモコウ、アザミ、ツリガネニンジンなどの草原性植物が見られる。

### 管理方針

は、年1回の刈り取りを行ない、高茎草地（現在はセトカワダチウ）として維持する。

は、年1回の耕運を行い、一年草の低茎草地として維持する。

（池田と呼ばれる）は、年3回の刈り取りを行って、リンドウ等の畦の植物を育成する。

は、初芝高校の実習田として米づくりが行なわれており、稲刈り後～田植え前間は、レンゲ畑として管理する。



「池田」と呼ばれる休耕田③の畦

## 草地管理地

### 現況

休耕田にササが密生した状態で、草刈り等の手入れが必要とされている。

### 管理方針

現在のササ藪を刈り払い、適切な草刈り管理を行なって、草原性の野草が見られる草地として維持する。



## 草地管理地

### 現況

ため池の堤の斜面で、もとはササ藪であったところを2～3年刈り取った。現在は丈の低い草原になっており、ツリガネニンジンやワレモコウが見られる。

### 管理方針

毎年の草刈り管理を継続し、草原性の野草が見られる草地として維持する。



## 水の生きもの池

### 現況

2年前に休耕田のササ藪を刈り取り池を掘って、水生の動植物が生息できるビオトープを創出した。奥の谷のメダカを放流したところ、非常によく繁殖している。

### 管理方針

基本的にはこのまま放置して推移を見守る。今後の試みとして、一部に水路を掘って流水部分ができるように工夫し、カワニナ（ホタル）やドジョウが生息できるような環境づくりを目指す。



夏のような



池の全景：右端部分は水深を深くしてある

## 活動拠点（作業小屋、広場）

### 現況

作業小屋は今まで所有者の好意で、道具置き場等に使用させてもらっていたが、今年、富田林市との間で正式な賃貸契約が交わされた。

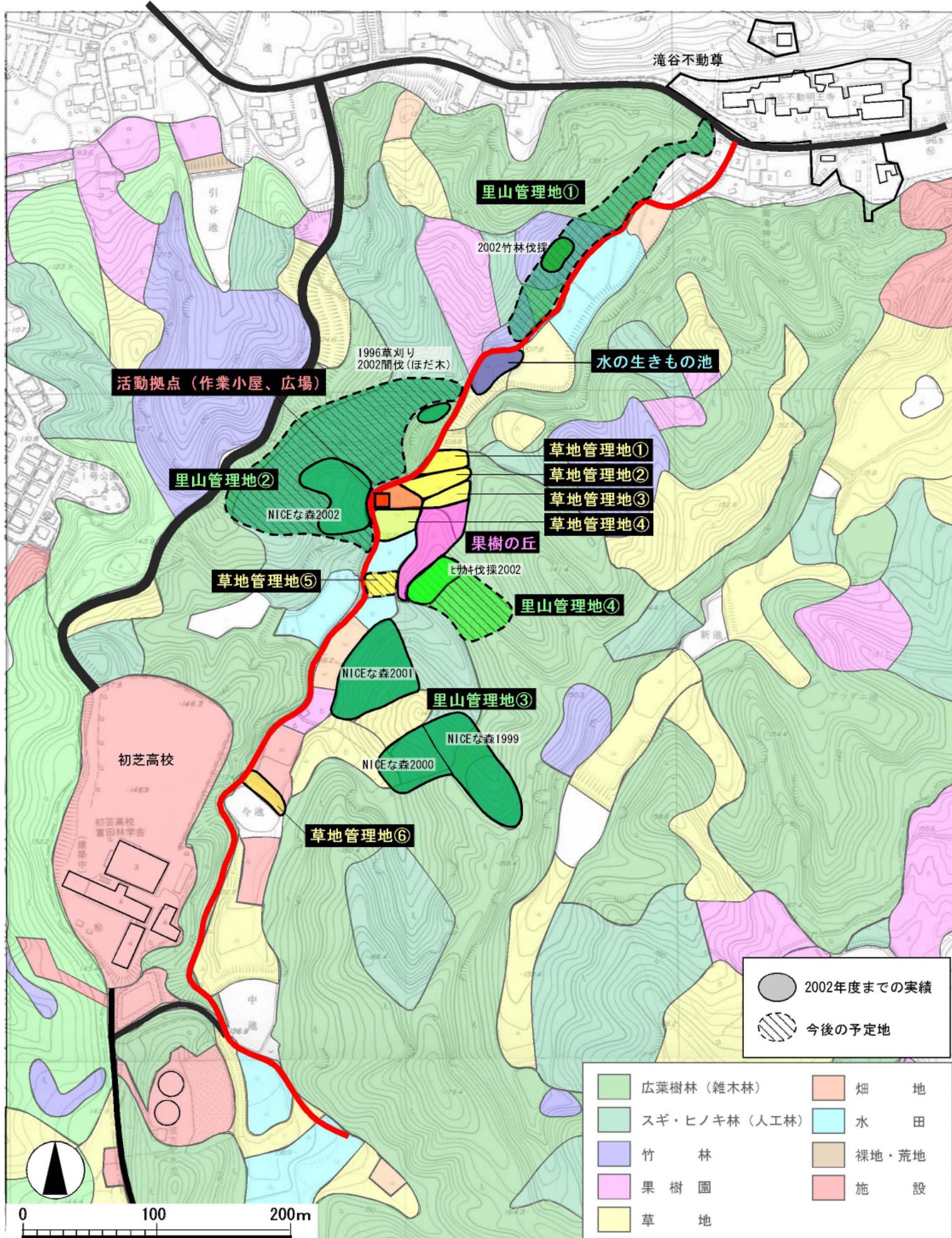
また小屋前の休耕田は所有者の了解を得て、ボランティアの集いや交流、様々なプログラムを催す広場として利用している。

### 管理方針

今後、作業小屋は内部を改修して、雨天時の活動や簡易な宿泊などに対応できるようにする。小屋前の休耕田は広場としての利用を継続し、堆肥置き場などの整備を検討する。



# 奥の谷モデル地区 里山管理方針図



# 富田林とNICE・ワークキャンプ

NICE 関西事務局長 初田裕美

## 1. 国際ワークキャンプとは？

国際ワークキャンプとは、世界の若者が2～3週間一緒に生活しながら、地域の住民と環境保護・福祉・農村開発等に取り組む、国際ボランティア事業です。1920年代に第一次大戦が終わった後、「こんなに多くの血が流されたのも、お互いの理解不足だ」と痛感したフランスとドイツの若者が、国境の地を一緒に耕したことから始まり、世界中に平和事業として広がって行きました。

現在では、国連ユネスコが設立したCCIVS（国際ボランティア活動調整委員会）に加盟する91ヶ国のNGOが、年間約2,580ヶ所で開催しています。

参加者：日本・海外の若者が平均して10～20名程度＋地域住民が数十～数百名

ワーク：地域によって様々で、森の手入れ・動植物の保護・荒れた畑の再生・廃校の改修・村祭りの運営・廃屋の改築・障がい者やお年寄りのお手伝い、など

宿泊：公民館・寺・青少年の家・学校等。交代で自炊するので各国料理満喫

その他：自由時間には、ホームステイ・学校訪問・討論会・交流会などが組まれることも

共催団体：地方自治体・学校・社会福祉協議会等の公的な機関、環境・農業・福祉・教育・村おこし・海外協力等の民間非営利団体、地域の様々な方々が結成する「国際ワークキャンプ」実行委員会、など

## 2. NICEとは？

NICEは、日本・アジアで国際ワークキャンプを主催する、若者主体のNGOです。90年に設立、会員は約1,000名、女性/学生が各7割以上です。2002年は5ヶ国で57回主催、32ヶ国から628人のボランティアと7,624人の住民が参加しました。また59ヶ国のワークキャンプに659人の日本人を派遣し、143回の週末ワークキャンプを企画し、2,879人が参加しました。CCIVSの副代表やNVDA（アジア・ボランティア発展ネットワーク）の代表も務め、若い力と地域の力で地球新時代を切り開いております。

現在、東京と大阪に事務所を構え、専従職員5人と多くのボランティアとで運営しています。

## 3. 「富田林の自然を守る会」とNICE

1998年12月にNICEが以前からお世話になっていた、大阪自然環境保全協会に大阪でワークキャンプができそうな団体を紹介して欲しいとお願いをしたところ、「富田林の自然を守る会」を紹介頂き、1999年夏に「北条・飯盛の里山を保全する会」と共催で国際ワークキャンプを実施しました。

その後も週末ワークキャンプやNICEの合宿・プレキャンプなどを頻繁に行っています。

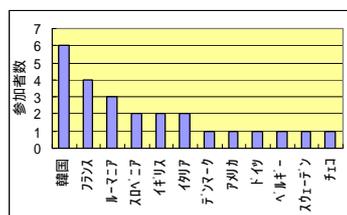
2002年からNICEの関西事務局が大阪市内にできてからは、富田林の自然を守る市民運動協議会にもオブザーバーとして参加しています。

## 4. 99年からの国際ワークキャンプ

上記のように、「富田林の自然を守る会」とNICEは、99年から7～8月に2週間の国際ワークキャンプを実施しています。そして、この4年間における実績は表1、外国人参加者の国別数は図1になります。



2002年の参加者



<図1 外国人参加者の数>

ワーク：奥の谷を中心に、スギ・ヒノキ植林地で作業しています。「NICEな森」という素敵な名前を頂き、NICEメンバーを中心に国際・週末ワークで手入れしています。4年間やってきた森は、

NICEな森99・00・01・02と、毎年増えていっています。夏の暑い時期で、外国人は毎年ヒーヒー言いながら日本の蒸し暑さを実感しているようです。

その他：毎年、ワーク以外にもホームステイや交流会・歓迎会にさよならパーティーなど、様々な形で住民の方々と交流することが

でき、参加者の満足度も高く、富田林市民にも徐々に浸透して来ているのではと思っています。02年は地元の高校生や大学生も例年より多く参加し、今後も地域住民の方々を多く巻き込んで、

年	日付	場所	内容	宿泊	参加者
99	7/26～8/10	富田林市彼方奥の谷	間伐と道作り	初芝富田林ログハウス	7ヶ国から18名 住民多数
		大東市北条	草刈り、間伐、ベンチ作り	プレハブ小屋	
00	7/22～8/05	富田林市彼方奥の谷	間伐、倒木処理、遊歩道作り、休耕田でのあぜ・草刈り	初芝富田林ログハウス、旅館等	5ヶ国から12名 住民多数
01	8/04～8/18	富田林市彼方奥の谷	間伐、遊歩道作り、皮むき	初芝富田林ログハウス、城山オレンヂ園	6ヶ国から14名 住民多数
		太子町葉室	間伐、下草刈り、草刈り	山小屋	
02	7/27～8/10	富田林市彼方奥の谷	間伐、下草刈り、皮むき	初芝富田林ログハウス、城山オレンヂ園	5ヶ国から15名 住民多数
		太子町葉室	倒木処理、皮むき	山小屋	

<表1 4年間における国際ワークキャンプの詳細>



うまく切れるかな



歓迎会で

更なる実績を残していきたいと意気込んでおります。

#### 5. 週末ワークキャンプ

国際ワークキャンプの2週間だけでなく、普段の週末のワークにも参加したり、1泊2日でNICEの合宿として行う時もあります。この1・2年では、NICEのホームページからのNICEメンバー以外の参加も多くなり、今までとは違う層への広がりを感じています。

のどかでどこか懐かしい奥の谷のファンも多く、里山という言葉もNICEメンバー間では知る人も増えてきています。

また、週末ワークキャンプの持つ可能性をもっと引き出そうと、NICEでは、「週末ワークキャンプリーダー養成合宿」を実施し、富田林での週末ワークキャンプをさらに良いものにしていこうと行動中です。03年3月には、NICEメンバー以外の一般参加者を広く募集する、週末ワークキャンプも企画し、関西圏の潜在的な人々を多く巻き込み、今後につなげていきたいと考えております。

#### 6. 最後に

ここまで読んで頂き、ありがとうございました。既に述べたように、「富田林の自然を守る会」の皆さん、特に田淵さんには大変お世話になり、私たちは心から感謝しております。これからも、週末ワークキャンプ・国際ワークキャンプ・中長期ボランティアなどで更なる活動を広げ、富田林の里山保全活動により多くの人々を巻き込み、豊かな自然を後世に残して行きたいと思っております。夢いっぱい素敵で日本&地球を、私たちの手で創っていきましょう！これからもどうぞよろしくお願い致します。

年	回数	参加者数
1999	7	52
2000	10	69
2001	12	-
2002	12	96

<表2 週末ワークの数と参加者>

## 里山管理ボランティア養成講座 受講者の感想

富田林の自然を守る市民運動協議会は、里山を保全する人材を育てることを目的に“里山を知る・学ぶ・体験する”“ふるさとの里山づくりをあなたの手で”をキャッチフレーズに、里山管理ボランティア養成講座を実施しました(講座の内容はp.37参照)。講座は2002年10月～2003年2月に5回実施、20人が受講しました。受講者の方々から下記の感想が寄せられました。

### 体験を通して里山のノウハウが身についた

里山を“知る”“学ぶ”“体験する”のキャッチフレーズに引かれて参加しました。漠然とした里山認識が、回を追うごとに鮮明になり、更に体験を通して里山保全のノウハウが身に付いたなあという思いです。また、富田林だけでなく各地に里山保全を考える人たちがいて里山を守っているということ、そういう方々とも交流が持てたこともよかったです。(酒井則行)

### 人と自然が共に生きることが大事と感じた

里山を通してより自然を深く知る事ができたような気がしています。人と自然がバランスのよい関わりをし、共に生きる事がとても大事だと強く感じました。又、スタッフの皆様には、とてもお世話になりありがとうございました。色々学ぶ事、得る事が多く充実した楽しい時間を過ごす事ができました。(山田洋子)

### 若い世代の受講生を望む

これまで5～6年の間に、森林・自然環境etcに関する講座をいくつか受講してきたが、改めて認識を深められたと思う。生涯学習のつもりで、フィールドでの活動と併せて今後も機会があれば受講していきたい(この講座のように受講料が安ければ)。受講生がリタイア組及びその予備軍が多かったが体力的に下り坂、その点将来の時代を担う若い世代の受講生を望みたい。6団体が連携した「市民運動協議会」地域の活動として理想的で素晴らしいです。

(山地 真)

### 自然いっぱいの里山がほしい

里山と自然、すべてが変わったなあと思う。動物にしても、子どもの頃には、クワガタ・メダカ・・・たくさん捕り、遊んだことを思い出す。野山が荒れ、整備されないままに成っている。自然環境を考え、森林や水を大切に、アゲハチョウが飛び回る自然いっぱいの里山がほしい。

(溝花英三)

### 人間は長い歴史の中で野山と共存共栄してきたことがよくわかった

毎回、「楽しかったな。参加してよかった。」と満足な気持ちで帰宅することができました。野山を歩くことは好きですので、自然に対して関心はありますが、間伐とか枝打ちとか、私にできるのかしら?とっておりました。けれどノコギリを使って実際に木を切りたおした時は気分がとてもよかったです。自然に対して人間が何も手を加えないのが「自然」と思っておりましたが、長い歴史の中で人間は野山と共存共栄してきたのだということがよくわかりました。自然の恵みをいただくことで、自然の生態系も多少変化させつつ、穏やかに共存する。そして現在では、その力関係が大きいくずれてしまっていることも。ひのき・杉などの植林された林のそばを歩くと昼でもうすぐらくて、ジメジメしていて、なんだか気分がよくなかったのですが、それは管理がちゃんとされていなく、放りばなしになっているからなのだということもわかりました。子どもの頃、学校では山に木を植えて、森を育てましようと思った記憶がありますが、今では、その森が手を入れる人もなく放置されているのを見るのはとてもつらいことです。今後の活動については、私は今何をしたらよいのかわかりませんが、何か続けていけたらよいのと思います。(西澤淑子)

### 中山間地域の活性化に自信を持った

切口(視点)が専門的かつ多様化しありがたかった。中山間地域の活性化が里山という豊富な自然をとおして可能だという自信を持った。

(吉岐文彦)

### 里山の自然環境保全には人手が必要と実感

里山の自然環境の保全には、やはり、人手はかなり必要だと実感しました。いつも机上ばかりですが、樹種転換などを見ると40～50年の目で、管理を考えることをあらためて思いました。

(井上和彦)

### 自然を後世に伝えることの大切さを痛感

いわゆる「里山」について、様々な視点から専門的立場の方々からのご意見を聴かせて頂き、興味深く思いました。単に私は「自然に沿った」人間本来の姿がやりたくて「米づくり」や「野菜づくり」をさせてもらっておりますが、こうした「自然」を守り後世に伝えることの大切さを改めて痛感しました。（佐竹樹之）

### 人生の設計に環境保護運動が大きな位置を占めそう

感覚的にしか考えられなかった自然環境保護（里山保全）を理論的に解き明かしてもらい、とても良かったです。自分のこれからの人生の設計に、この環境保護の運動が、大きな位置を占めるようになりそうです。（上拾石剛）

### 都会でのストレスを忘れる講座でした

今度はどのような講義が聞けるのか、本当に楽しみでした。実習も楽しく皆んなやり始めると夢中に作業しました。始まった頃は汗を一杯かく気候でしたが今は作業後の熱いお茶と焚き火がうれしい奥の谷の作業場です。雑木林の中で季節を感じながらの作業、都会でのストレスを忘れる講座でした。（久松邦夫）

### 有意義な講座で目が開かれる思いでした

大変ためになり有意義な講座で目が開かれる思いでした。実習、講座とも内容豊で濃密なもので感銘しました。ただ講座の回数と時間が少なかったのが残念です。もう一度あるなら、知識的なこと理論的なこと技能面について、もっと細かな点まで深く学習したいと思うようになりました。（天堤 勇）

### 市民・行政・（企業）のパートナーシップが鍵の印象を受けた

講義と実習を毎回楽しみに参加させて頂き感謝しています。子どもの頃里山で遊んだ事を懐かしく思い出しました。身近な里山が環境保全に寄与している事を認識し里山から地球環境を考えると市民・行政・（企業）のパートナーシップが鍵を握っているという印象を受けた。当ボランティアが益々拡大する事を願っています。（白石紘一）

### 偉大なる里山をよく理解出来た

有意義な本講座を開催していただきありがとうございました。本講座で里山の歴史・成り立ち・文化など日本人の生活が、この中で、していた大切さをよくわかりました。但し、里山の管理をどうすべきかをもっと具体例で欲しかったです。但し、里山の生活のよさと、現在の生活との差、公害のない偉大なる里山をよく理解出来ました。（佐藤洋一）

### 地元の理解と協力を得てはじめて活動がなりえる事を再認識

里山保全活動を進めるにあたり、ボランティアが現地に入り間伐・除伐・草刈り等の作業を一方的に行うのではなく、その場所を生活の基盤として活用されている地権者を含め地元の方々の理解と協力が得られてはじめて活動がなりえる事を再認識させられました。（大西由兼）

### 自然を守るという土台がしっかりした

何となく自然は大事だ、残さなければという思いだけではなく自分で読んだりしただけの少ない知識の上に今日講師の方々の科学的な話を聞くことができ、自然を守るという意義（土台）がよりしっかりしたように思います。植える木の密度を低くすることにより、わざと木の低い部分が太くて、高い部分が細い木をつくり、その勾配を利用して舟の底板にするという話はとても印象的でした。（上角清子）

### 今後も里山ボランティアとして続けたい

田舎で育った私にとってこの養成講座は子どもの頃の自然を思い出させてくれました。衰退していく数少ない里山をどの様にして守り、緑豊かな里山になる様に維持・管理する大切さがわかり、楽しんでする事が出来ました。今後も里山ボランティアとして続けていきたいと思えます。（伊藤十三男）

# 石川の河川改修と自然環境

田 淵 武 夫

(「石川あすかプラン」を考える市民連絡会)

富田市の中央部を南北に流れる石川は金剛葛城山系に源を発し、大和川に合流する全長約30kmの一級河川である。その約3分の1にあたる富田市の高橋から羽曳野市の新石川橋までの約11.6km(約172.6ha)を治水とあわせて河川敷公園にする「石川あすかプラン」と称する河川改修計画が進められている。すでに治水のための護岸工事は終了し、「自然ゾーン」と呼ばれる約1.6km(約43ha)の区間(河南橋～南阪奈道路上流端)を除いて、両岸はほとんどコンクリートで固められ、直線的な水路となっている。そして、河川敷(高水敷)には都市型公園やグラウンドが造られ、かつて自然豊かであった石川のかなりの部分はその姿を変え、貧弱な植生となっている。そして現在では「自然ゾーン」だけがかろうじて自然に近い姿をとどめている。

「日本産蝶類の県別レッドデータ・リスト」(矢田・上田,1993)には河川改修によって絶滅の危機に瀕しているチョウ類の例が多く示されているが、この石川の河川改修によっても植生の変化にともない多くの昆虫をはじめとする小動物が生息場所を奪われ、減少しているものと推察できる。

私たちは1994年3月に「石川あすかプランを考える市民連絡会」を結成し、自然に配慮した河川改修を求めて活動してきた。その取り組みの一端を紹介して、石川の植生と昆虫を含む小動物の保護について考えてみたい。

## 石川の植生

1993年の大阪府南部公園事務所の委託調査によると「自然ゾーン」には349種類の植物が確認されている(大阪府南部公園事務所・環境設計株式会社,1993)。また、私たちが自然ゾーン左岸で行った調査においても、開花していた植物だけで176種を確認している。このように、一部に不法工作の畑や地元の野球チームが造った小規模なグラウンドなどは存在するものの、比較的自然に近い状態が保たれている河川敷においては多様な植物相がみられている。

上記の176種の植物についての帰化植物の比率および多年草の比率を近隣の里山(嶽山;富田市内)での調査と比較したものが表1である。「自然ゾーン」では帰化植物が42.6%と水田を含む谷あい(奥の谷)の20.0%、山林の内部の0%と比べて多い。また、多年草の割合は、「自然ゾーン」では42.0%と奥の谷の55.2%、山林の内部の85.2%と比べて少なくなっている。ちなみに嶽山の山頂付近に最近広範囲に表土が剥

ぎ取られ禿山となったところがあるが、ここでの帰化植物率は42.0%、多年草率は45.7%といずれも「自然ゾーン」とほぼ同程度であった。

河川敷は出水により絶えず表土が流され攪乱されるために、帰化植物や1～2年生草本が多くなるものと思われる。嶽山山頂付近では表土がはがされたために石川河川敷に似た環境となり、同じような植物相となっているものと考えられる。このように「自然ゾーン」は山林の林床やたんぼの畦などと異なり、1～2年生草本が多く、かつ帰化植物が多い、さらには植物種数も多い草原といえる。「自然ゾーン」の上流部および下流部は治水工事が終わり、高水敷の多くの部分が公園化されているが、かつては「自然ゾーン」と同様、多様性に富んだ植生であったものと考えられる。

表1 帰化植物率および多年生植物率の石川自然ゾーンと嶽山の比較

地 域		植物種数	帰化植物率 (%)	多年生植物率 (%)
石川自然ゾーン		176	42.6	42.0
嶽 山	奥の谷	105	20.0	55.2
	山中の林床	27	0.0	85.2
	頂上付近(禿山)	81	42.0	45.7



写真1 直線的な低水路護岸が築かれ、高水敷は平坦に整地される



写真2 低水路護岸も築かれてなく、ほぼ自然な状態(凹凸があり変化に富む地形)



写真3 低水路護岸が築かれ、平坦に整地されて間もない状態



写真4 低水路護岸が築かれ、都市型公園が造成された状態

### 河川改修による植生および昆虫への影響

石川における河川改修は、まず治水工事として直線的な低水路護岸が築かれ(このとき川全体が一度完全に掘り返される)、高水敷は平坦に整地される(写真1)。その後の高水敷に都市型の公園やグラウンドが造成される。公園の場合には芝生が貼られたり、低小木が植樹されたり、あるいは循環式の滝や池などの構造物が造られ、アスファルト舗装の園路がひかれる。これによって本来の河川敷の植生はほとんどみられなくなる。したがって、現在の石川の高水敷には大きく分けて次の5種類の環境が存在する。①低水路護岸も築かれて

なく、ほぼ自然な状態(凹凸があり変化に富む地形; 写真2)。②平坦になっているが低水路護岸はなく長期間放置されている状態。③低水路護岸が築かれ、平坦に整地されて間もない状態(写真3)。④低水路護岸が築かれ、都市型公園が造成された状態(写真4)。⑤低水路護岸が築かれ、グラウンドが造成され

表2 河川改修による河川敷の環境の変化と植生

観察場所	種類数	草丈(平均)cm	優先種
護岸工事なし,変化に富む(自然ゾーン)	32(+10)	82	ネズミムギ、オオブタクサ、ヨモギ、クサヨシ、コメツブツメムサ、クズ
護岸工事なし,平坦(自然ゾーン)	27(+8)	192	セイバンモロコシ
護岸工事後,平坦	19(+3)	107	ネズミムギ、ヨモギ、カモジグサ、シナダレスズメガヤ
護岸工事済み,都市型公園	5(+1)	26	シロツメクサ、メズミムギ

( )内はコドラート外

21種		
トノサマバッタ		
クルマバッタモドキ		
ショウリョウバッタ		
オンバッタ		
ササキリsp		
カマキリsp		
シオカラトンボ		
イトトンボ		
セグロアシナガバチ		
ホソヘリカメムシ		
ハソハリカメムシ		
ブチヒゲカメムシ		
マルカメムシ		
ウズラカメムシ		
ヒメマルカメムシ		
ハマベアワフキ		
ヒメカメノコテントウ		
ヒメアカボシテントウ		
マクガタテントウ		
トビイロハゴロモ		
ルリテントウダマシ		
8種		
クルマバッタモドキ		
ショウリョウバッタ		
オンバッタ		
カマキリ		
フタモンアシナガバチ		
ブチヒゲカメムシ		
クロナガカメムシ		
カメムシsp		
1種		
クルマバッタモドキ		

未工事地域 (自然ゾーン)      護岸工事後 数年放置      西行うたのみち (都市型公園)

図1 河川改修工事による河川敷の環境の変化と昆虫

てほとんど植物がない状態。

このうち①～④の状態での植生を調べた結果を表に示す。縦、横各10mのコドラート(植生調査用の正方形の枠;編集者注)内の植物種数は、①では32種、②では27種、③では19種、④では5種であった。このように公園化されれば極端に植物の種数が減少し、変化に富む地形では植物相が多様化していることがわかる。①～③の違いは、ハードな低水路護岸が築かれると水路と高水敷が分断され、水分の連続性が断たれるため高水敷全体が乾燥した状態になること。さらに平坦に整地されると一層乾燥し、均一な環境になることによるものであり、④はその上に芝生などが植栽され、頻りに刈り取りが行われることによるものと考えられる。

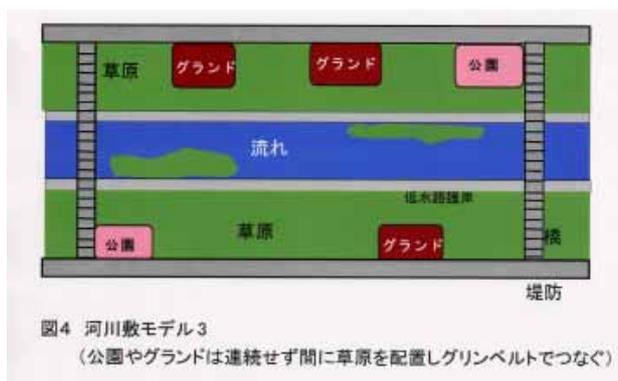
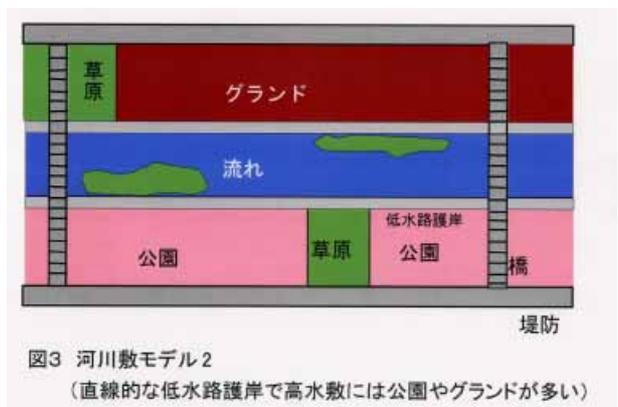
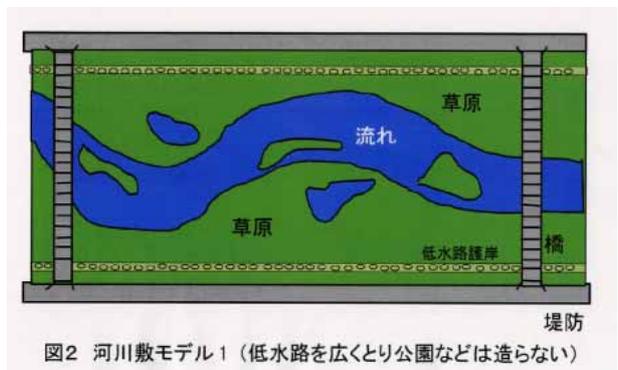
図1は上記のような環境の違いによって昆虫の種類数がどのように異なるかをみたものである。同一人が8月の快晴の日の13時～15時の間、各調査地で30分ずつ、ネットィングまたはスィーピング法によって採集した。

未工事地域(①に相当)では21種類の昆虫が採集できたのに対し、低水路護岸工事後整地し数年が経過した地域(③に相当)では8種類、都市型公園(④に相当)では1種類であった。

以上のことから、同じ河川敷でも水分を多く含み、変化に富んだ地形ほど植物の多様性が増し、植物相が多様なほど昆虫の種類も多様であり、おそらく他の生物相も含めて豊かな生態系がつくられているものと考えられる。

## 河川改修に望むこと

そこに生息する動植物にとっては、人間が河川の形状に手を加えないに越したことはない。しかし、洪水から私たちの生活を守るためには治水事業はどうしても必要となる。私たちは今日の河川のあるべき姿として次のように考えている。「治水は私たちの生活を守る上できわめて大切なことであり、万全の対策と配慮が必要である。しかし、そのための工事には多様な河川の生態系を守る上から、多自然型工法などの自然にやさしい工法を採用する必要がある。そしてその後はできるだけ自然の流れに任せるのがよく、やむをえず人の手を加える場合には必要最小限にとどめるべきである。一方川は人々の生活と深く関わって利用され、親しまれてきた。そのような河川に



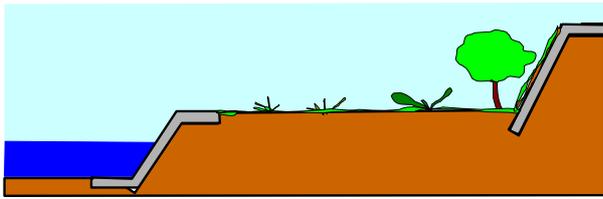


図5 河川敷モデル4 (ハードな護岸と平坦な高水敷)

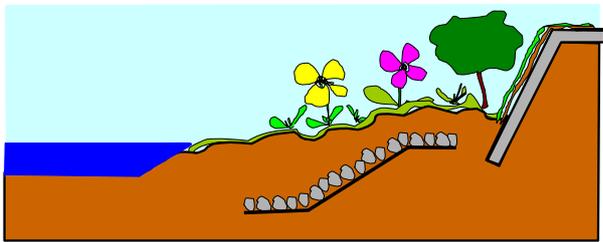


図6 河川敷モデル5 (透水性の護岸と変化に富んだ高水敷)

関わる人々の生活と文化の歴史を大切にすべきであり、両者を調和させた河川の管理が必要である」(「石川あすかプランを考える市民連絡会」設立の趣旨より)。

このような考えから、石川の河川改修に関して次のようなモデルを考えてみた。図2～4は平面図である。図2は低水路護岸を透水性の構造として、できるだけ堤防寄りに築き、護岸と護岸の幅を広くとる。水路はその間を自由にゆっくりと蛇行しながら流れる。治水工事だけを行い、公園などはつくらない理想的なモデルである。これは「自然ゾーン」の一部に取り入れられている。

図3は「あすかプラン」の区域にすでに多くみられる状態である。直線的なハードな低水路護岸が築かれ、幅広くとられた兩岸の高水敷にはグラウンドや公園が造成されて、草原はほとんどみられない。この状態では植物や昆虫や野鳥などへの影響が極めて大きいと考えられる。

図4は、すでに直線的でハードな低水路護岸に改修された高水敷に公園やグラウンドを設置する場合のモデルで、間に草原を十分にとり、グリーンベルトで草原と草原をつなぐ。この場合、草原の部分には凹凸をつけ地形に変化をつける。このようにすれば動植物に与える影響を相当減弱できるものと考えられる。すでに図3の状態になっている地域も、今後このように改修することは可能であろう。

図5～6は断面図である。図5はハードな低水路護岸を築き、高水敷は平坦に均された状態である。この状態では水路と高水敷が遮断され、均一に乾燥した河川敷となり単純な植生となる。「あすかプラン」の区域では「自然ゾーン」を除く全てがこの状

態となっている。

図6は接続ブロックや蛇かごなどの透水性の低水路護岸で、護岸の上に覆土して隠し護岸とし、さらに高水敷に凹凸の変化をもたせている。このようにすれば環境が多様化し、河川改修のあとにも多様な生態系が再生できるであろう。「自然ゾーン」では私たちの主張が取り入れられて、透水性の護岸が採用された。

以上のことから、河川改修に望まれる条件を以下のようにまとめることができる。

低水路護岸は透水性の隠し護岸とする。

低水路護岸の幅をできるだけ広くとり、その間で自由な流れとする(こうすることによって、瀬や淵が形成される)。

高水敷は平坦にしないで、凹凸の変化をもたせる。

公園は原則として造らない。地域住民の要求などでどうしても造る場合には、自然を生かしたものとし、都市型公園は造らない。

広場やグラウンドを造る場合には、交互に自然の草原を配置し、草原と草原をグリーンベルトでつなぐ。

工事はできるだけ植生に配慮し、必要ないところは掘り返さない。

## 「自然ゾーン」での公園づくり

1998年に大阪府南部公園事務所に、「新しい自然復元や保全の手法を積極的に研究導入し、地域住民の理解と協力を得て、事業を進めることが重要」として、学識経験者と住民団体による「石川河川公園自然ゾーン検討委員会」が設置された。この検討委員会の報告書(大阪府南部公園事務所・都市緑



写真5 自然復元のために変化に富む地形が造成された

化技術開発機構, 1999) には、管理運営の基本的方針として、①「身近な自然」をつくる(中流域の流れ、フラッシュの起こる流れ、多様な地形など基盤となる環境をつくって待つ)、②じっくりとつくる(自然の創造と復元には長時間を要する)、③地域住民とともにつくる、④安く手軽につくる、⑤情報を共有することが記されている。現在、地域住民、運動団体、石川河川公園事務所などで「自然ゾーンワークショップ」がつけられ、上記の管理運営方針に基づいて、「自然ゾーン」における自然環境の保全と復元が進められている(大阪府南部公園事務所・株式会社ヘッズ 2000, 2001, 2002)。

今年(2002年)3月に右岸の一部(A地区と呼ぶ)について、平坦にされていた高水敷に2m程度の高低差をつくり、増水時に支流の梅川からの流れができるように水路を造成するなど地形に大きな変化をもたせる工事が行われた。半年経った現在はエノコログサ、メヒンバなどの1年生草本を主体にした草原が形成されている(写真5)。今後、植生の推移とあわせて昆虫の出現の様子についても調査し記録にとどめたいと考えている。

## 【参考文献】

- 大阪府南部公園事務所・株式会社ヘッズ(2000) 石川公園「自然ゾーン」ワークショップ運営報告書.
- 大阪府南部公園事務所・株式会社ヘッズ(2001) 石川公園「自然ゾーン」ワークショップ運営委託報告書.
- 大阪府南部公園事務所・株式会社ヘッズ(2002) 石川公園「自然ゾーン」ワークショップ運営委託報告書.
- 大阪府南部公園事務所・環境設計株式会社(1993) 石川河川公園せせらぎサンクチュアリー保全手法検討委託報告書.
- 大阪府南部公園事務所・都市緑化技術開発機構(1999) 石川河川公園「自然ゾーン」管理運営計画.
- 矢田脩・上田恭一郎編(1993) 日本産蝶類の衰亡と保護 第2集, 日本鱗翅学会・日本自然保護協会.

【この文章は「南大阪の昆虫」Vol.4 No.3 2002(南大阪昆虫同好会会報)から一部修正して転載しました】

# 「富田林の自然を守る市民運動協議会」

## 参加団体の活動紹介

### ① 富田林勤労者山岳会 「嶽の会」

嶽の会は、1977年南河内の山好きの仲間が集まり結成されました。「安く、楽しく、安全に」をモットーに、「身近な山から、世界の峰まで」を合言葉に、今年で創立26年になります。そして、日本勤労者山岳連盟、大阪府勤労者山岳連盟加盟の1団体でもあります。

私達は単に山に登ることだけでなく、山(自然)を楽しむ権利を後世に引き継ぐためにも自然保護運動や、最大の自然破壊行為である戦争反対、核兵器廃絶の運動にも関わってきました。

また、結成時の呼びかけ文には、「山に登ることは、私達が生活している社会とは、切っても切り離せないこととして捉え、社会のすべての事をよく知り、考えてゆくことをめざします。」「自然を一部の人達の金儲けのために破壊して、何らかえりみようとしない政治にたいしても大きな役割をはたしていきます。(以下略)」ともあります。

具体的には、毎月のハイキング(登山)の他に、創立以来続けている清掃登山(6月:金剛山)、20回を迎えた障害者登山(9月)、2000年から始めた大阪府下一斉NO<sub>2</sub>調査(5月:大気汚染の指標のひとつである二酸化窒素量を簡易カプセルで測定する)の協力、原水禁の平和行進(最近は参加していませんが)、年4回の機関誌の発行、公開ハイキングなどがあります。

富田林の自然を守る市民運動協議会には2002年5月から団体加入させていただきました。今年は何も出来ませんでした。今後、私たちの会の名の由来となった嶽山周辺のいちばん身近な自然である「里山」で、ハイキング道の管理(清掃)やハイキング講習の実習地としての利用を考えています。

それらの取り組みを通じて、富田林市の自然を守る運動の一助になればと思っています。

.....

連絡先: 上角敦彦(自然保護担当), 〒584-0024 富田林市若松町4-6-29, TEL/FAX 0721-24-8757



昨年の清掃登山、金剛山(水越峠～山頂)

## ② 錦織公園自然友の会

「錦織公園自然友の会」は、大阪府営「錦織公園」での各種イベントを中心に、嶽山竜泉地区での竹の炭焼き、千早赤阪村小吹での竹やぶ管理作業を「竜泉里山クラブ」として活動しております。

錦織公園は、羽曳野丘陵の南端にあり、小さな山々がつづら折になった地形で甲子園球場15個分の面積にあたります。園内には1300年前の古墳「堂の山古墳」があります。朝鮮半島から戦乱を逃れて渡ってきた織物職人たちの長が葬られていると言われていいます。渡来人たちの織った錦織は日本で初めて造られた国道「竹の内街道」を通過して飛鳥寺へ納められたのではないかと推測されています。

昔から里山として利用されてきたこの丘陵を出来るだけ開発しないで里山公園として整備されています。昔懐かしい里の家も再現されています。家の前には、小川のせせらぎに水車が回り、畑では作物が作られています。里山に囲まれた農家に入るととても落ち着いた気分になります。



錦織公園 河内の里の家

### 「錦織公園自然友の会」の概要

平成8年4月発足 会員数80名(平成14年12月現在)

### 平成14年度の活動状況

4月7日 総会とお花見の会

4月29日 愛パークフェスタ

5月19日 自然観察会「芋生えしらべ」

7月21日 自然観察会「昆虫かんさつ」

8月18日 夏休み「手作り工作」

- 9月15日 自然観察会「山道ウォーク」
- 10月20日 自然観察会「キノコしらべ」
- 11月3日 「どんぐりまつり」
- 12月23日 竜泉「みかん狩りと竹炭焼きたいけん」
- 1月13日 手作り凧あげ
- 2月16日 自然観察会「里山間伐たいけん」
- 3月16日 自然観察会「里山間伐たいけん」
- その他 毎月第一土曜日「里山調査間伐会」



クラフトづくり

連絡先：松原安茂，〒584-0074 富田林市久野喜台2-10-15, TEL 0721-29-5043

### ③ 特定非営利活動法人 里山倶楽部

里山倶楽部は、「好きなことして、そこそこ儲けて、いい里山をつくる」をコンセプトとして、里山の保全管理や環境教育に関するさまざまな事業を行なっています。会員は約250名。毎月1回の定例活動日（どんびの日）の他に、次のような活動があります。

#### 連続講座

里山の学校（里山基礎講座） 辻谷森林ゼミ（人工林管理） 里林班（雑木林管理）  
窯の穴（炭焼師養成講座） ぴびぴラボ（ファシリテーター養成講座）

#### 自由参加活動

とんびくらぶ（山仕事体験） タントンハン（無農薬米作り） 森のキッチン（料理・クラフト）  
菜・遊・季（摘み菜・伝統野菜） スウェットロッジ セレモニー（自己啓発） かぼちゃ倶楽部（講義・討論）

#### 企画運営・コンサル事業

里山環境教育オフィス（森づくりやワークショップの受託事業） 3まんま企画（プログラム企画運営）  
ど組・け組（森林作業請負、炭・薪販売）

今年、嶽山や奥の谷周辺では、「菜・遊・季」と「とんびくらぶ」が開催されました。

### 菜・遊・季 ～四季を摘み 旬を食し 野に遊ぶ～

日頃見過ごしがちな可憐な野の草花に、あたたかな手作りクラフトや季節の野草料理を通じて親しむ講座です。講師の先生のもと、奥の谷の四季を楽しみました。

H14年6月23日（日）野の草花のクラフト

講師：佐藤三和子氏 「棕櫚の蛙のモビールづくり」

H14年8月25日（日）摘み菜料理

講師：平谷けいこ氏

H15年1月5日（日）摘み菜料理

講師：平谷けいこ氏 「春の七草」



### とんびくらぶ ～里山の山しごとと遊びを体験しよう～

里山初心者が楽しみながら龍泉寺近くの果樹園を手入れしています。甘夏やすもも、栗や柿、レモン、キウイなどを収穫しました。今後は新しい果樹の苗を植える予定です。

H14年5月5日（日）草刈り&甘夏採り

〃 7月7日（日）すもも採り&シャーベット

〃 8月4日（日）草刈り

〃 9月8日（日）草刈り

〃 10月6日（日）秋の味覚採り

H15年1月11日（日）草刈りと竹伐採

〃 1月12日（日）地図づくり&レモン狩り

〃 2月9日（日）ススキ、ササ刈り



.....  
里山倶楽部についてのお問合せ：NPO法人里山倶楽部 事務局（大塚） TEL&FAX.06-6889-6096  
里山環境教育オフィス（寺川） TEL&FAX.072-333-0309  
HP：<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/bamkero/index.html>

## ④ 石川あすかプランを考える市民連絡会

本市民連絡会は、石川の自然環境を守ることを目的として1994年に発足しました。1999年からは市民と行政が協働して石川の整備のあり方を考える「石川河川公園自然ゾーンワークショップ」に参加し、さまざまな活動を行なっています。

### ■活動の内容

1. 「あすかプラン」の見直しを府に要望する：「石川あすかプラン」を見直し、環境保全・自然保護の観点を大きく取り入れるよう、大阪府及び関係市町村に要望する。
2. 河川管理のあり方を学習する：河川管理のあり方や自然環境保全などについて学習する。
3. 生物調査に基づき提言する：石川に生息する生物の調査を行い、石川の自然保護について提言する。
4. 周辺住民の意見を聞く：石川周辺住民をはじめ、多くの人々の意見を聞き、暮らしを考え、自然を守る立場から、要望や提言に反映させる。
5. 市民参加のあり方を研究する：市民が参加できる河川公園のあり方について研究する。
6. 多くの人に賛同を呼びかける：より多くの人々に、私たちの考えを宣伝し、賛同を呼びかける。

今年は、ワークショップにおいて「石川流域講座」や「石川流域フォーラム」などが開催され、石川河川公園自然ゾーンの設計について考える検討会も活発に行なわれました。

## 石川流域講座 ～石川を学ぶ・石川で遊ぶ・石川の自然を守り育てる～

6月～11月まで全5回の講座が開かれました。講座終了後は「生きもの」「水・地形」「総合学習」のテーマごとに、講座生による自主活動がはじまっています。

- 6月 8日 石川の自然環境とレッドデータ植物
- 7月 21日 石川の生きもの～魚が住みやすい環境とは～
- 8月 31日 もんどり打って石川にはまる
- 9月 21日 石川の生きもの～野鳥と昆虫～
- 10月 19日 流域の視点から見た石川
- 11月 16日 自主活動に向けて・石川の竹で遊ぼう



## 石川流域フォーラム ～川で結ぶ人・自然・暮らし～

ワークショップのこれまでの活動の成果発表や、石川をテーマとした総合的な学習の情報交換、及び、今後取り組むべき市民参加活動についてのアピールを行ない、石川流域で活動する市民や団体、学校、行政の交流の場をつくり、石川流域の人・自然・暮らしのネットワークづくりを進めることを目的として開催しました。

- 主催 石川流域フォーラム実行委員会
- 後援 大阪府、NPO法人近畿水の塾
- 開催日 平成15年1月19日
- 内容 市民と行政の活動報告、総合的な学習の情報交換会  
パネルトーク、市民アピール、パネル展示など

参加者 72名

参加校 富田林市) 新堂小学校、喜志小学校、喜志中学校  
羽曳野市) 古市南小学校、西浦東小学校、羽曳野高校  
河内長野市) 天見小学校



連絡先：笠原英俊、〒584-0086 富田林市津々山台1-5-1、  
TEL/FAX 0721-29-7894

## ⑤ 富田林の自然を守る会

富田林の自然を守る会は「身近な自然に親しみ、自然を愛する心をやしなう、富田林の自然を守り、住みよいまちづくりをすすめる」ことを目的として、1989年6月に設立されました。会員数は現在約130名です。「自然観察や調査活動を行う、講演会などを開き、自然保護について学習する、冊子『富田林の自然』を発行す」ことを活動の目標としています。

具体的な活動は以下の通りです。

### 1. 自然観察会

主として植物の観察を、嶽山を中心に行っています。

### 2. 植物、昆虫などの生息状況の調査

1997年に嶽山の植物調査を実施、2001年には奥の谷の昆虫調査を実施しました。その後も植物及び昆虫について調査を続けています。

### 3. 自然の中で遊ぶ各種イベント

「野草を食べる会」、「昆虫観察会」、「つる細工の会」などを実施しています。

### 4. 里山保全活動（草刈り、間伐など）

奥の谷で 雑木林の下刈り、間伐、スギ・ヒノキ林の間伐・枝打ち、休耕田の畦や溜池の土手などの草刈り、休耕田を利用した水の生き物池づくりなど

### 5. 講演会、学習会などの自然についての学習

### 6. 国際ワークキャンプの実施（NICE との共催）

1999年より毎年国際ワークキャンプを実施、スギ・ヒノキ林の間伐を行っています。間伐した森を「NICEな森99」「NICEな森2000」「NICEな森2001」「NICEな森2002」と名づけ引き続き管理を進めています。

### 7. 富田林の自然環境保全に関する提言

（奥の谷での活動の多くは、昨年6月より協議会の事業に移行しています）



間伐作業



お昼のひととき

---

連絡先：田淵武夫

〒584-0024 富田林市若松町4-16-21,

TEL/FAX 0721-24-7960,

e-mail: ttabuchi2002@yahoo.co.jp

## 役員会

- 4月17日(水)午後7時～9時 905会議室  
参加者8人 内容 保険加入、賃貸借契約、年間活動計画(里山管理作業、自然観察会、里山環境講座、国際ワークキャンプ、自然環境保全活用調査、里山管理ボランティア養成講座、冊子「富田林の自然」の発行)
- 5月22日(水)午後7時～9時 905会議室  
参加者7人 内容 保険加入、賃貸借契約、活動計画  
富田林勤労者山岳会「嶽の会」が協議会に加入、上角敦彦氏を理事に選出
- 6月19日(水)午後7時～9時 905会議室  
参加者6人 内容 保険加入、賃貸借契約、活動計画
- 7月19日(水)午後7時～9時 905会議室  
参加者6人 内容 活動報告・活動計画
- 8月21日(水)午後7時～9時 905会議室  
参加者7人 内容 活動報告・活動計画
- 9月20日(金)午後7時～9時 905会議室  
参加者5人 内容 活動報告・活動計画
- 10月21日(月)午後7時～9時 904会議室  
参加者6人 内容 活動報告・活動計画
- 11月21日(木)午後7時～9時 904会議室  
参加者7人 内容 活動報告・活動計画
- 12月20日(金)午後7時～9時 904会議室  
参加者5人 内容 活動報告・活動計画
- 1月15日(水)午後7時～9時 904会議室  
参加者6人 内容 活動報告・活動計画
- 2月19日(水)午後7時～9時 201会議室  
参加者5人 内容 活動報告・活動計画
- 3月19日(水)午後7時～9時 904会議室  
参加者5人 内容 活動報告・活動計画・総会議案書

## 里山環境の講座について

- 8月18日(日)手作り工作 午前10時～3時 錦織公園  
参加者60人 事業報告 牛乳パック・木の実・ペットボトル等の工作
- 12月8日(日)自然クラフト 午前10時～3時 奥の谷  
参加者15人 事業内容 つる細工

#### 里山管理作業「富田林里山ホリデー」

- 6月22日(土)午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者11人 事業内容 NICEな森の観察路づくり
- 7月14日(日)午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者11人 事業内容 NICEな森の観察路づくり
- 9月28日(土)午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者10人 事業内容 間伐材の整理
- 10月26日(土)午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者4人 事業内容 間伐材の整理 NICE合同32人参加
- 11月10日(日)午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者15人 事業内容 枝打ち 公民館講座と合流
- 11月23日(土)午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者15人 事業内容 生きものの水辺づくり
- 1月12日(日)午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者14人 事業内容 竹切り
- 1月25日(土)午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者13人 事業内容 竹切り
- 2月9日(日)午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者22人 事業内容 竹切り
- 3月9日(日)午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者15人 事業内容 竹切り
- 3月29日(土)午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者 人 事業内容

#### 自然環境の観察会について

- 6月9日(日)自然観察会 午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者11人 事業内容 奥の谷5月~7月に咲く草花
- 7月13日(土)昆虫ウォッチング 午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者32人 事業内容 奥の谷昆虫採集
- 9月15日(日)自然観察会 午前10時~午後3時 錦織公園  
参加者20人 事業内容 錦織公園の山道ウォーク
- 10月13日(日)自然観察会 午前10時~午後3時 奥の谷  
参加者5人 事業内容 奥の谷9月~11月に咲く草花

#### 協議会交流会

- 12月22日(日)午前10時~ 奥の谷  
参加者20人 事業内容 協議会参加6団体の交流会

◆里山管理ボランティア養成講座に、 20人が受講しました。

10月5日(土)	午前10時～午後3時 市役所902・903会議室 <b>里山の自然と人々の暮らし</b> 講師：木下陸男 (大阪自然環境保全協会副会長)	午後1時～3時 彼方(奥の谷) 森の見学(雑木林・ スギ・ヒノキ林など) 植生調査
11月2日(土)	午前10時～午後3時 市役所902・903会議室 <b>里山とその管理</b> 講師：伊藤孝美 (大阪府立食とみどりの総合技術C. みどり環境部主任研究員)	午後1時～3時 彼方(奥の谷) 雑木林の除伐、樹木の選択 がり
11月30日(土) ～(宿泊) 12月1日(日)	午前10時～午後3時 市役所902・903会議室 <b>景観生態学から見た里山</b> 講師：佐藤治雄 (大阪府立大学名誉教授)	午後1時～3時 彼方(奥の谷) 草刈り、間伐、枝打ち、階 段づくり
	午前10時～午後3時 彼方(奥の谷) 竹炭焼き、測量	
1月18日(土)	午前10時～12時 市役所902・903会議室 <b>里山の生きもの</b> 講師：石井 実 (大阪府立大学教授)	午後1時～3時 彼方(奥の谷) スギ・ヒノキ林の間伐、枝 打ち、階段づくり
2月15日(土)	午前10時～12時 彼方(奥の谷) 実習地を含む嶽山の観察	午後1時～3時 市役所401会議室 どういふ森をつくるか(討 論)、修了式

◆冊子「富田林の自然」の発行  
総会の3月26日に、200部発行しました。

◆自然環境保全活用調査  
総会の3月26日に、調査報告書(案)を発行しました。

## 富田林の自然を守る市民運動協議会

富田林の自然を守る会	田淵武夫
錦織公園自然友の会	松原安茂
NPO 法人里山倶楽部	寺川裕子
南河内教育フォーラム	二宮一彦
石川あすかプランを考える市民連絡会	笠原英俊
富田林勤労者山岳会「嶽の会」	上角敦彦

### オブザーバー

日本国際ワークキャンプセンター関西事務局 初田裕美

### 事務局

富田林市総務部生活環境室

稲田照雄，道籟安幸，京谷 守，中尾友保，竹谷佳洋

〒584-8511 富田林市常盤町1番1号

TEL 0721-25-1000 (内422) FAX 0721-25-9980

e-mail seikatsukankyo@city.tondabayashi.osaka.jp

## 富田林の自然

2003年3月26日 発行

編集 富田林の自然を守る市民運動協議会

発行所 富田林市総務部生活環境室